

66

養生流小謡集

全

館書圖京東				
一	二		六	
	四		六	
冊	號	架	函	類門

075064-000-5

66-214

養生流小謡集 (明治改正)

矢田 正義 / 編

M28

CEL-1057





清
韻

清
韻

昭
琳
頌



清

蘭

清

如珠額

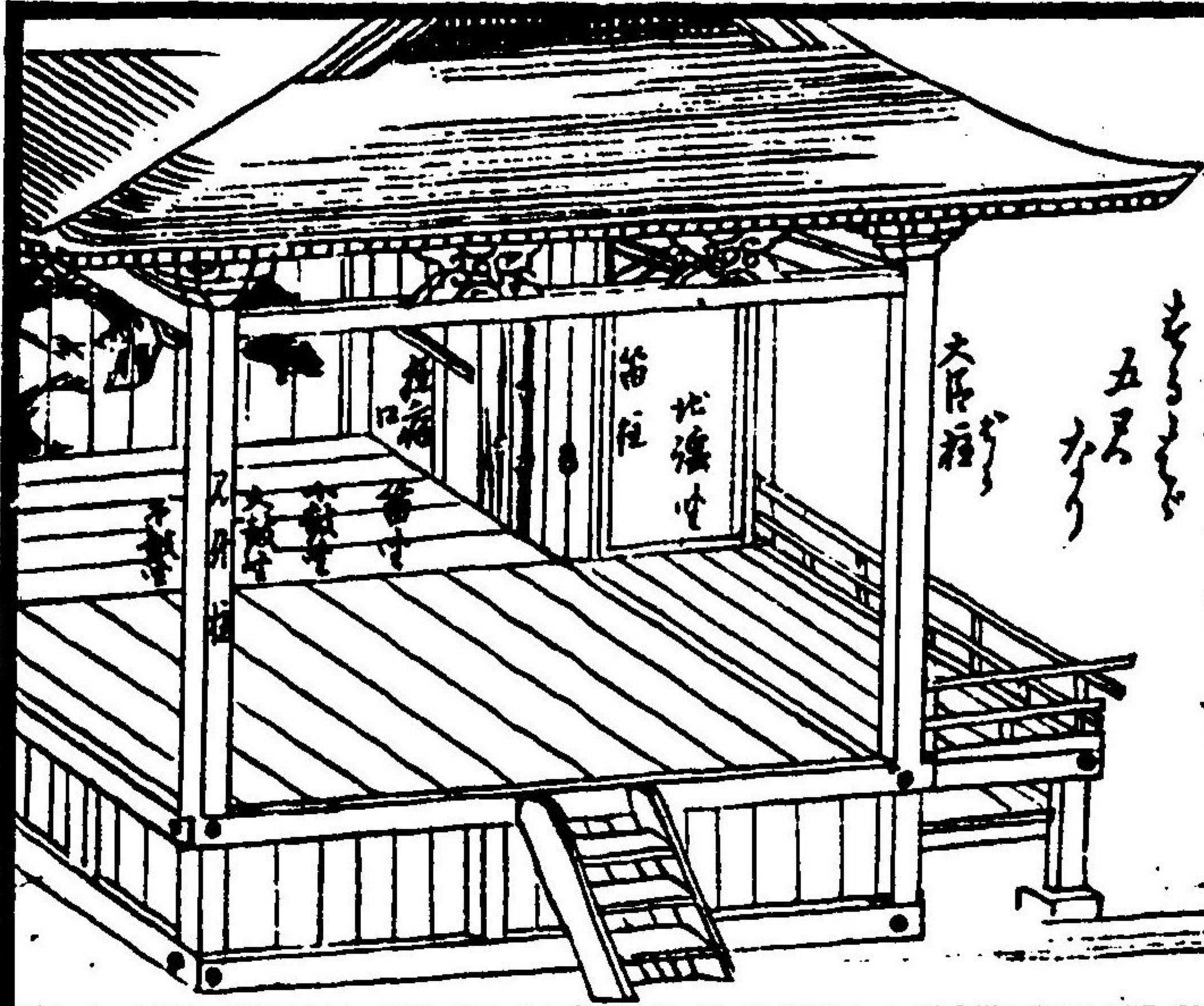
清

蘭

清

結露 奏の原 楽の原

この曲は、
九百十一年十一月
五層
なり

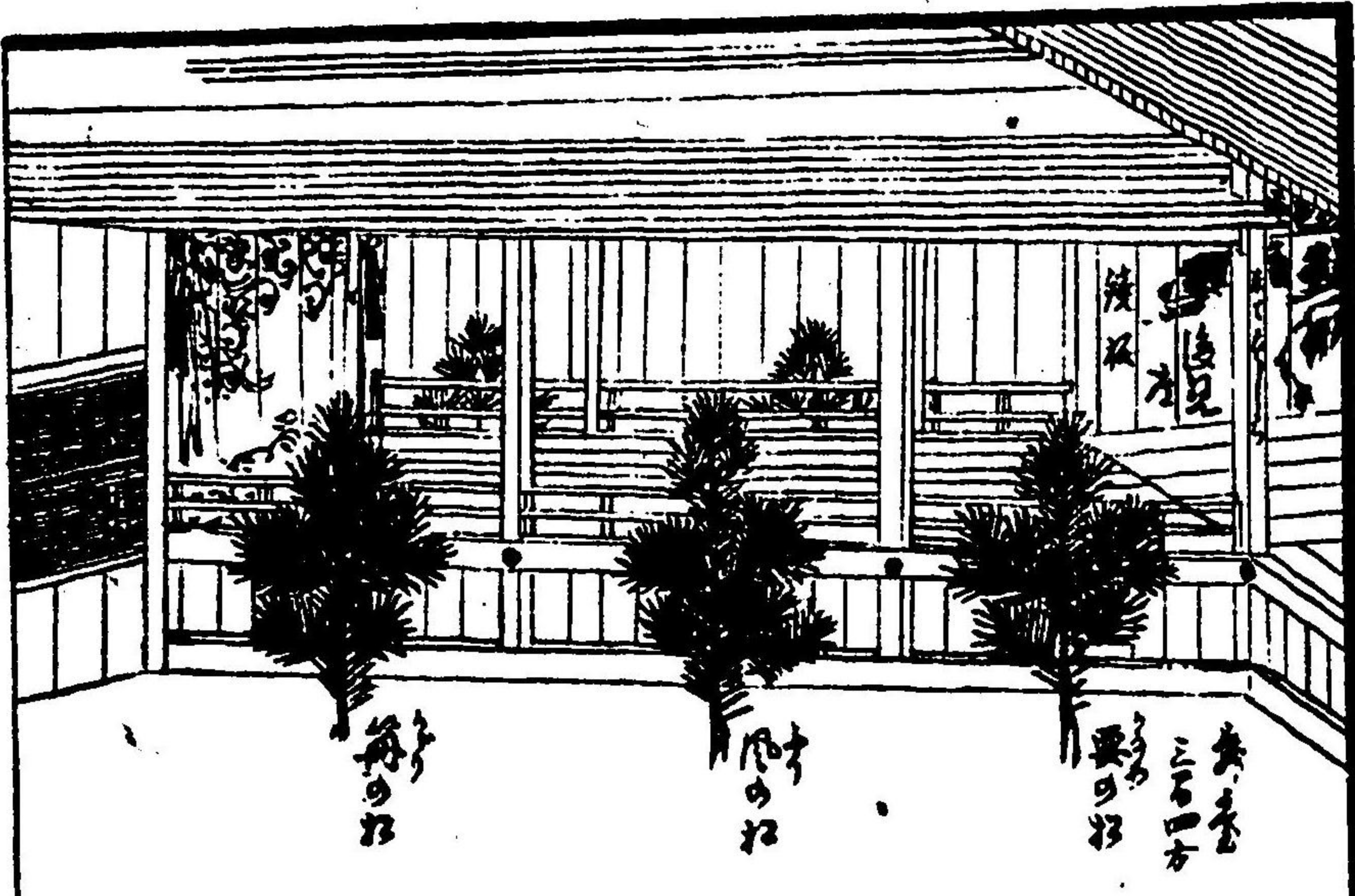


○ 法曲 起原

夫法曲の本朝の水土に相存したる自然の清音
かゝる法天神地祇を祀り禮を備へ樂に擧
四海波揺る万民康樂——太平を奏するの
和樂を神に獻り佛に法樂——まことに佛の
佛の慈悲を得たる法長久の法國の眞跡を
奏するべき事況言まかれば法を以て賀
するを以てしるべきものあり故に男兒はの
之を以ていふ後にまといり因居を以て鼓の疾を奏り
故事を知り形容自ら嚴に立根廻りやうふたる
の利ありまれば展朝の大典國家の式式に御
代々幕府の儀式諸侯の祝事必ら以之れを
奏——まはり

○ 法曲 概要

法曲の上巧下巧は修行練磨に於て共に得悉はれ
不巧者なり心は一つとして法曲の大要を心得



たれば功速なり早く上達するものなり

法曲の原は、大正のころから、直に法曲を奏
するものなり

夫て上巧の法曲は、神々しく、上りの音かき
やうやくゆわい、底は、まろこりの、法曲自在うそ、女
まろこりの、法曲の、大正の、清い、
法曲の、法曲の、清い、げ、見えて、今や、引らん
る、月、の、駒

法曲の、原の、法曲の、清い、げ、見えて、今や、引らん
る、月、の、駒

法曲の、原の、法曲の、清い、げ、見えて、今や、引らん
る、月、の、駒



かきく
 ○まの事
 ○婚禮の...
 ○移徙...
 ○お中出...
 ○佛事...
 ○徳祝...
 ○其外...
 ○俗曲...
 是等の...
 初...
 中...

○口申合せの事

あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
い	き	し	ち	に	み	ぬ	ね	り	い
う	く	す	つ	ぬ	む	ふ	ゆ	る	う
え	け	せ	て	ね	め	へ	れ	は	え
を	こ	ろ	と	の	も	も	ろ	は	を
事	事	事	事	事	事	事	事	事	事
通	通	通	通	通	通	通	通	通	通
ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず

口申合せの事
 口申合せの事
 口申合せの事

○小遣の指書...
 四書の...
 結婚...
 信...
 小遣...
 信...
 小遣...
 信...



物をつれいたしはまたかたはるの目もけの
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて
 かねたて

○能楽四座の次第

金春太夫
 現今 金春廣成

観世太夫
 同 観世清廉

寶生太夫
 同 寶生九郎

金剛太夫
 同 金剛鈴之助

以上

喜多平太夫
 同 喜多六平太

〇能楽四座の次第
 現今 金春廣成
 同 観世清廉
 同 寶生九郎
 同 金剛鈴之助
 以上
 同 喜多六平太



仕舞の場

よ...
 此の...
 四條は...
 前の...
 昔小...
 座席の...

○若人...
 昔一...
 若...
 人...
 一...
 ○昔...

徳十粒

い...
 目...
 方...
 ね...
 何...
 申...
 早...
 好...
 片...

初...
 有...
 遊...
 ○酒...
 客...
 ○小...
 無...
 何...

○着...
 事...
 概...
 口...



一の舞の音

かゝる或の曲のりつて低く又いさ音の流れ
 文句のあつらへたるは曲の骨をかりて流るる音
 に不忘たむ——只あつたふきくこと中音
 小音だ——音を去る音といふ個々の音
 或は人のちよと強ふ此は得るべきとて音を
 所感かかふて流るは差別はう音の内にて
 流る音は音の響きを見せしめるのちりり
 中音ふらふら——遊山の音流るは野山川
 の通るは音の響きを揚げて流るは音の骨を
 音流るは音の響きを揚げて流るは音の骨を
 去る音の響きを揚げて流るは音の骨を
 息きれて流るは音の響きを揚げて流るは
 音の響きを揚げて流るは音の響きを揚げて
 流るは音の響きを揚げて流るは音の響きを
 揚げて流るは音の響きを揚げて流るは音の
 響きを揚げて流るは音の響きを揚げて流る
 は音の響きを揚げて流るは音の響きを揚げ
 て流るは音の響きを揚げて流るは音の響
 きを揚げて流るは音の響きを揚げて流る

○流曲名数

二五十一	五	三	七	七	七
一	六	五	五	五	五
一	六	五	五	五	五
一	六	五	五	五	五
一	六	五	五	五	五

○流曲の初め

又能見物たり行とて必らず其音の流本
 持考——心中之れを流るは音の初心の
 人の音得せし且つ面白かるす
 ○流曲の初め——音の響きの上音中音下音の
 音の響きを揚げて流るは音の響きを揚げて
 流るは音の響きを揚げて流るは音の響きを
 揚げて流るは音の響きを揚げて流るは音
 の響きを揚げて流るは音の響きを揚げて
 流るは音の響きを揚げて流るは音の響
 きを揚げて流るは音の響きを揚げて流る



たえ
人の
強さ
の
あ
ま
り

知より有る事と持たざる事とありしが
 シテロキを以て強さの極なりと云ふ
 今人の強さの極なりと云ふ
 此所より強さを取れば膝の上より板我知る事
 痛を下に落して強さの極なりと云ふ
 我知る事と云ふ事先知らざらんかたえシテ
 キもろくもろく強さの極なりと云ふ事
 一たび強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事
 止りの息をつりて強さの極なりと云ふ事
 今人の強さの極なりと云ふ事
 ○素地強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事
 たりと云ふ事強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事
 神の強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事
 ○素地強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事
 夫を以て強さの極なりと云ふ事強さの極なりと云ふ事

實生家山錄集法

法家山錄如之流亦 王名官在能好生元稹精以在
其可之能之亦物換境久之亦亦作之能感之能其其
隔羅之能言其好江高又其其其其其其其其其其其
本此如改言其在冠婚吉慶之其用言事其其其其其
其其的古今以編其法集其其其其其其其其其其其
刻其法其其其其其其其其其其其其其其其其其其
其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其其

四卷廿七字

十丁月

夫田八古部

修撰

凡例

一本集ハ只夕謡曲一番ノ中ヨリ其一部ノ佳語ニシテ宴席一興ノ細章ヲ摘録ス

一本集ハ專ラ冠婚素賀ノ用ニ供スルカ爲メノ主意ナルヲ以テ凶語又ハ入佛乃至凶儀等ノ語アルモノハ之ヲ省ク

一頭書ノ能面小道具ニ挿画ヲ加ヘハ小童女兒ノ遊覽ニ供ス

一本集一部ノ小冊ヲ以テ小謡ヲ完結セシム可キヲス仍チ小謡等

ノ文集三卷ヲ近刻スレド本集ト冬観セハ多少ノ益アリ

寶生流小謡集

目錄

高砂	難波	老松	養老
竹生島	志賀	吳服	春日龍神
右近	三輪	邯鄲	冰室
鶴龜	西玉母	松尾	弓八幡
岩船	繪馬	嵐山	皇帝
大蛇	田村	頼政	八島
鞍馬天狗	敦盛	盛久	腋
俊成忠則	項羽	藤榮	羅生門
經政	熊野	玉葛	春榮
采女	千手	揚貴妃	高野物狂

杜若	半部	東北	祇王
藤	弱法師	六浦	葛城
艸紙洗	胡蝶	小督	加茂物狂
雲雀山	班女	鉢木	三井寺
木賊	酉行櫻	鸚鵡小町	櫻川
花筐	松虫	放下僧	竹雪
三笑	卷絹	飛雲	羽衣
とかる	阿漕	紅葉狩	藤戸
誓願寺	源氏供養	小臨	雲林院
國栖	野守	小鍛冶	鷲
鍾馗	須磨源氏	烏帽子折	狸々

通計八十四番百二十七章

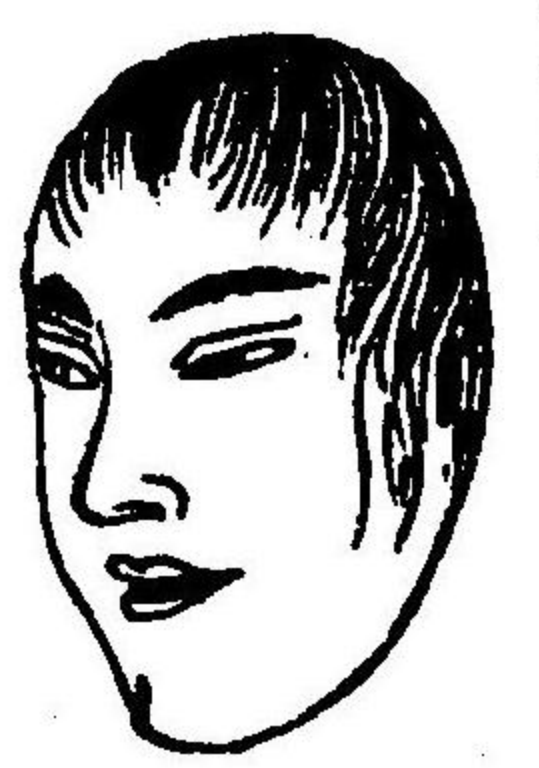
翁



三番叟



童



寶生流小謡集

後進 矢田八太郎選

○高砂

所々高砂の尾上の松も年寄りて老の
 波もすりくまや。本れ下流に落葉うくある
 正命ありらるる。おれいのもてらひきまら
 くれも文一さ名所りね

○同

四海は志つらふく。國も治まふ時を
 枝をあらたきぬ。流代なれおれひふおまの
 ねしをめくまかり。まはるるあひひかた

小尉



笑尉



朝倉尉



三光



名荷悪尉



鷲鼻悪尉



○同
 事もあつたつとていふ事ある民の豊
 うある者乃海にあり清路に

○同
 千秋樂ハ民を擡り美哉美哉といふを
 けふおまの松風奴とん清路を流

○雑波
 美の産けりし子里をとりあはれり
 波の影り影

○同
 雑波乃梅の名よみおひも四方ふ

まねく一花みらられハ天下は春あま
 代の於安全をえりたま

○同
 はるまふ引きつゝ聖人神代ははるま
 下我守り治むる天下我もあまむる
 あり受てあは

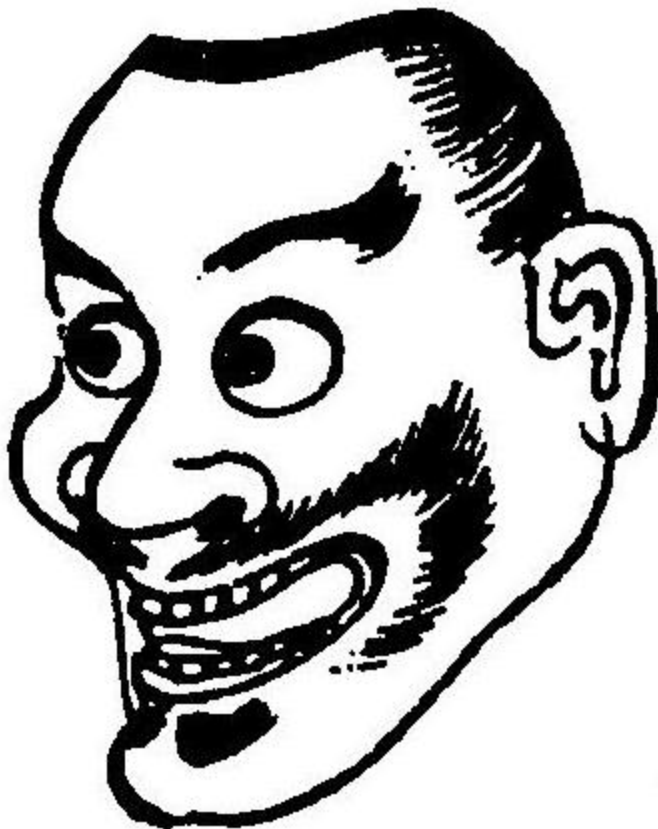
○光 ね
 天満をみるまあひの松も松も法共
 昔代の昔とあやな代昔代の昔とあ

○同
 齡を授けよははるの行まされと我神代

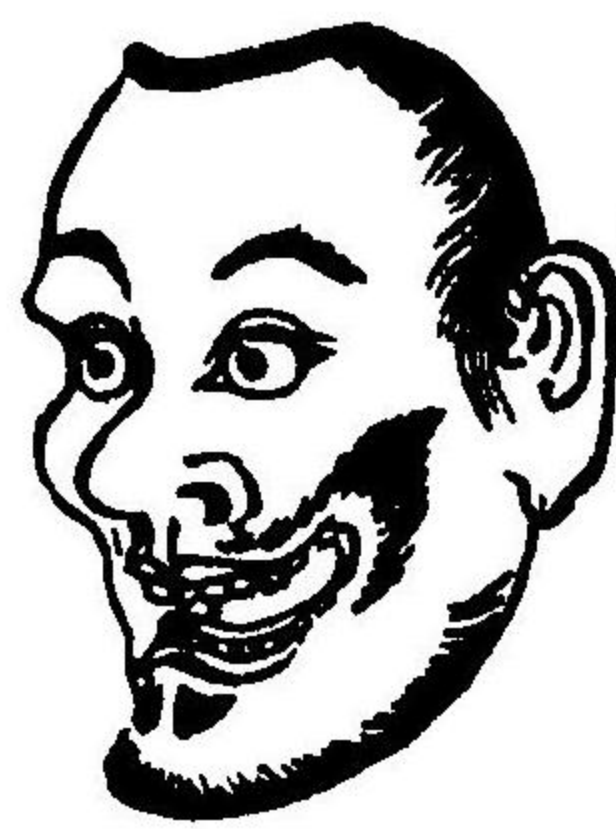
長天燕見



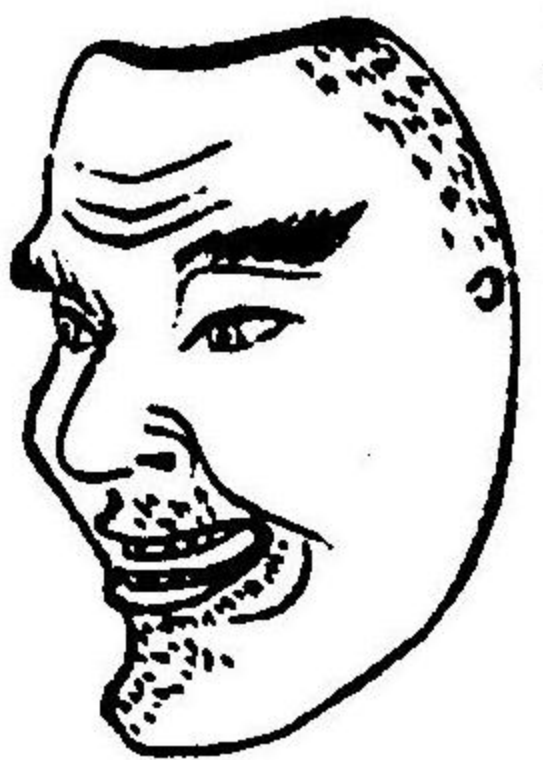
大飛出



小飛出



頼政



不動



大鷹



上ツテ、
 告を^レ知^ルも^レも。相^ノ風も^レ柄^ノも^レ久^クも^レ事^ヲ了^スも^レめ^ヲて^シま^シけ^シま^シ。

○巻 老

上ツテ、
 老を^レ延^スも^レ心^ヲ一^ニも^レ尚^シ東^ノ方^ニ一^ニ遊^ビれ^シ。

○回

上ツテ、
 雲^ノや^レ玉^ノ水^ノ。水^ノ上^ニも^レあ^リは^レ代^ヲと^テ流^レれ^シ。
 此^ノ來^ノの^レあ^らま^シ。さ^トし^テま^シあ^らは^シ精^ヲ一^ニに^シめ^シ。

○竹生嶋

上ツテ、
 緑^ノ樹^ノ陰^ヲあ^らむ^シ。魚^ノ木^ノに^レ登^リて^シ東^ノ方^ニを^レあ^らむ^シ。

上ツテ、
 一^ニ月^ノ海^ニお^し浮^ビむ^シ。う^らら^しむ^シ。波^ノを^レあ^らむ^シ。
 一^ニほ^ノの^レ面^ヲ白^レれ^シ。う^らら^しむ^シ。

○志 賀

上ツテ、
 今^ノ迄^ノの^レ筆^ノを^レ残^シ。貴^ノ之^ノ言^ヲ。
 筆^ノの^レあ^らは^レれた^レの^レつ^らら^しむ^シ。今^ノ迄^ノ道^ヲ。
 止^ラら^シめ^シ。

○回

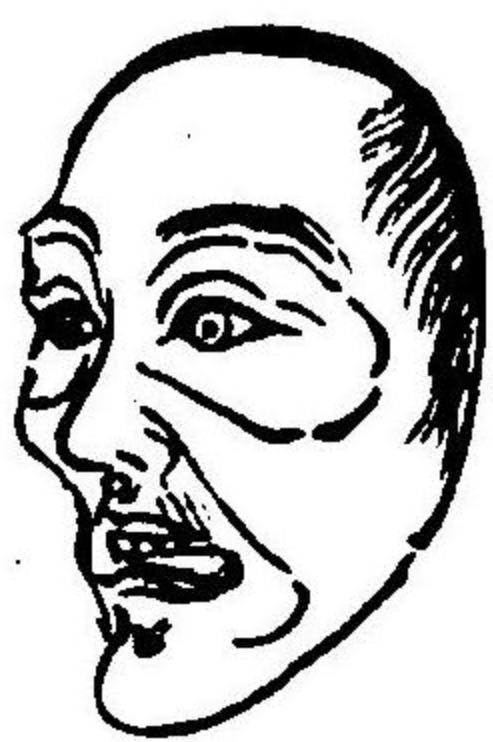
上ツテ、
 ち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。
 一^ニち^やの^レに^レ唄^ハ。さ^トし^テは^レ知^リた^レ。

○吳 服

天神



瘦男



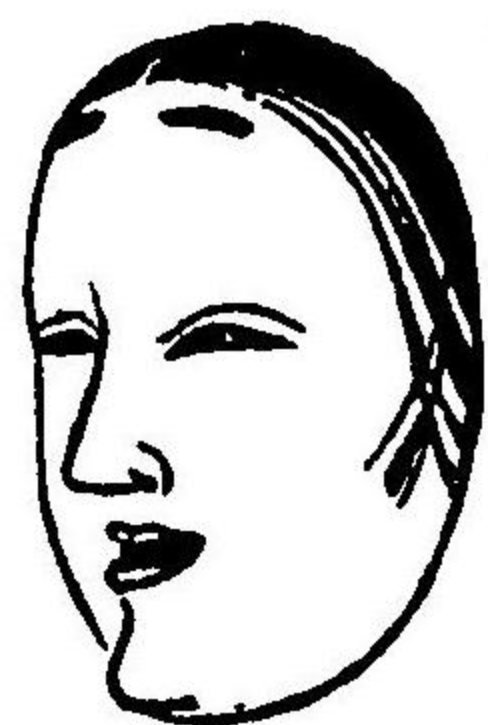
蛇



邯鄲男



小面



童子



ぬき筋の上よりきほ影ありしよよとぬき筋
ありき筋のゆき平や

○邯鄲

昔はこゝは長生殿の中にも長生殿を旨
あり不老門の前のよは日月の光りしよよと
るきすれされあり

○同一

飛あつたり有朝乃とあるまはたの
業花よも榮耀よも大注とあるま
き

○氷室

氷室はくまへして立上事なる友徳の
氷よもあつて氷室なるあり衣をれとも袖を
ゆるきしありけり

○鸕鷀

池の汀を渡るありて遠き山も余所あら
波のきけありて有難き

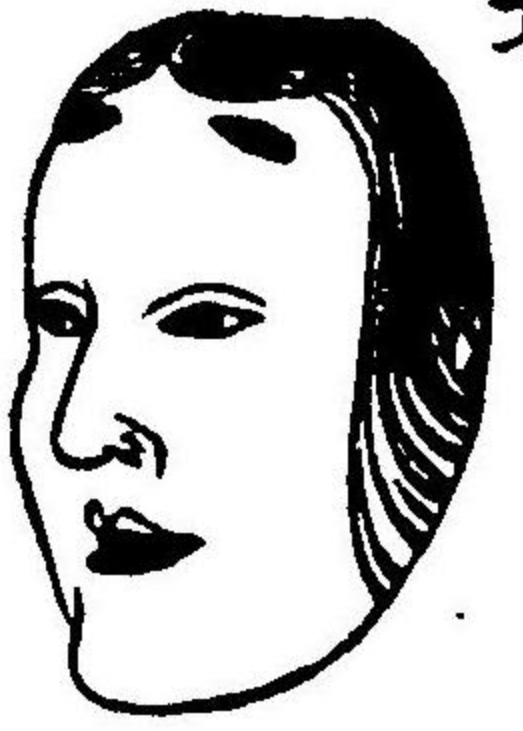
○西王母

西王母のきけありて有難き
心ありて有難き

○同一

若くもれき誰とてはさむるもあつて有難き

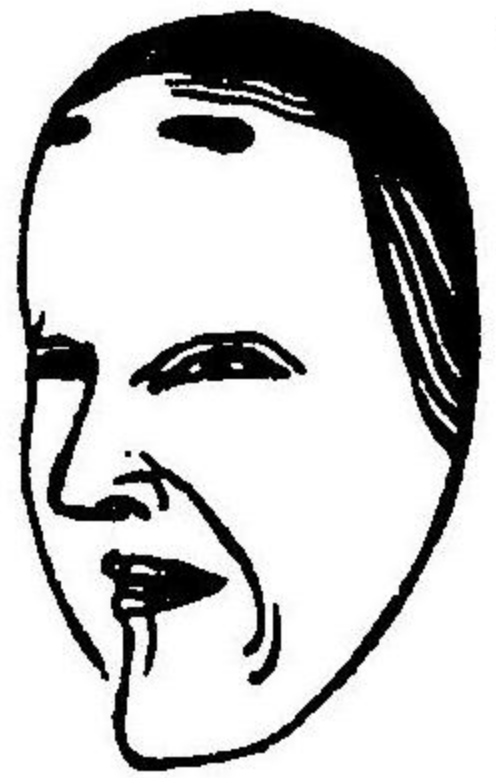
増



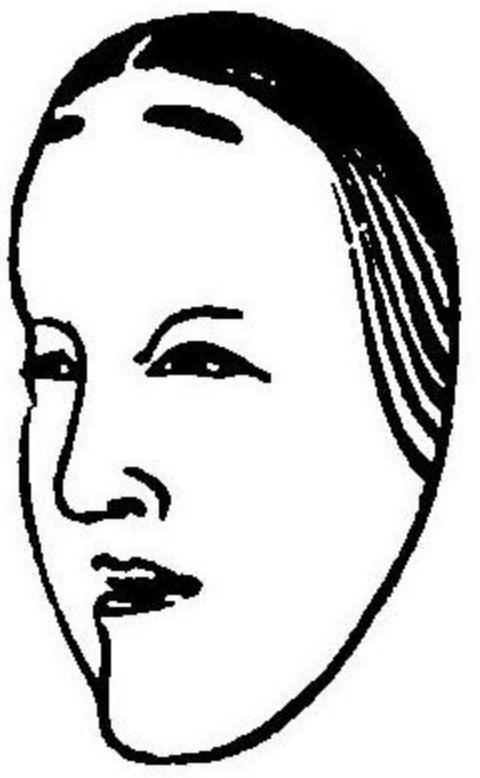
増髪



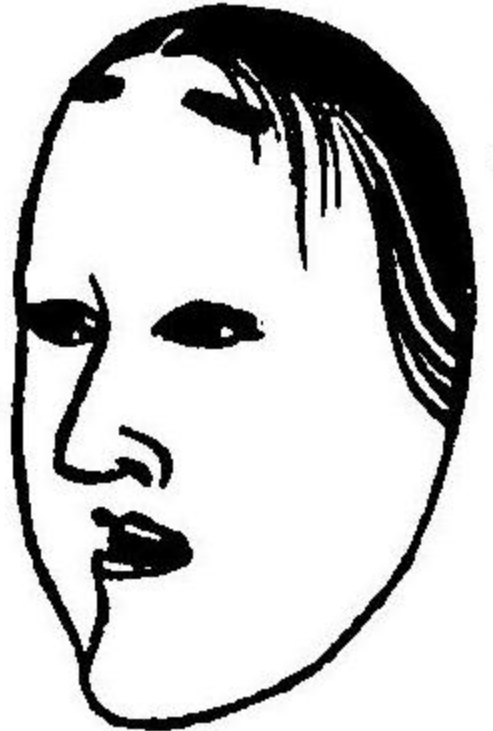
曲見



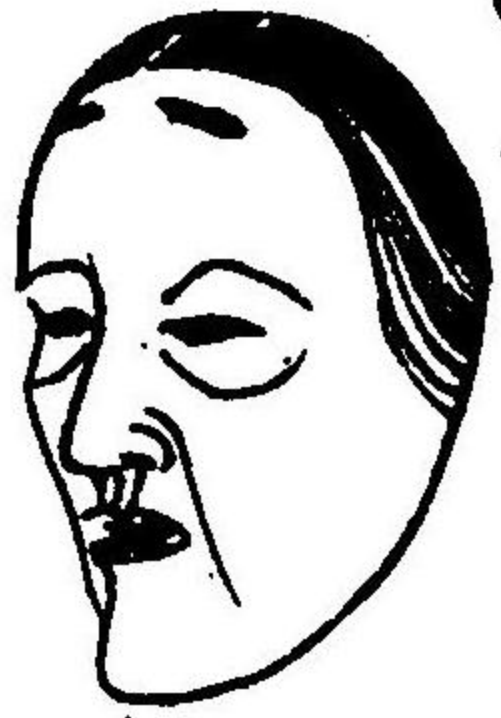
深井



泥眼



瘦女



三三

○同

三千年にありては龍の...
花...
あつき國ありては...
えおる

○松尾

生果もねまは法人...
あらう

○同

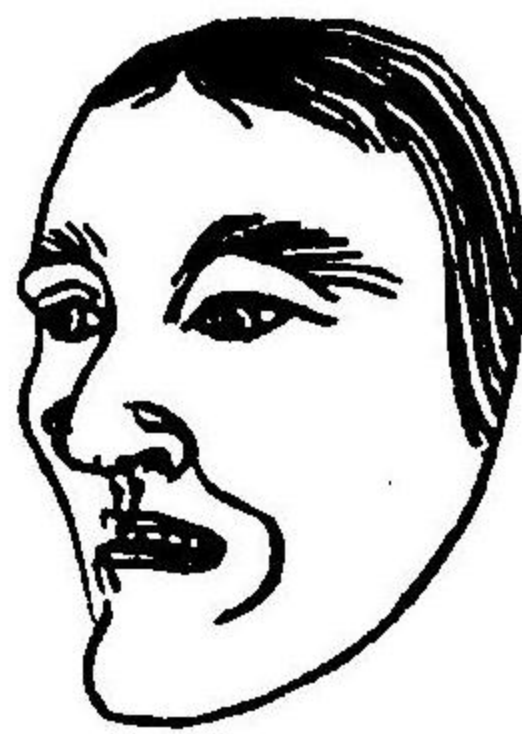
交る並心頼...
深井...
久...
尾の種植...
○弓ハ橋

○弓ハ橋

君万葉と祈る...
○同

上ツラ...
れきゆる...
路...
りきれ

山姥



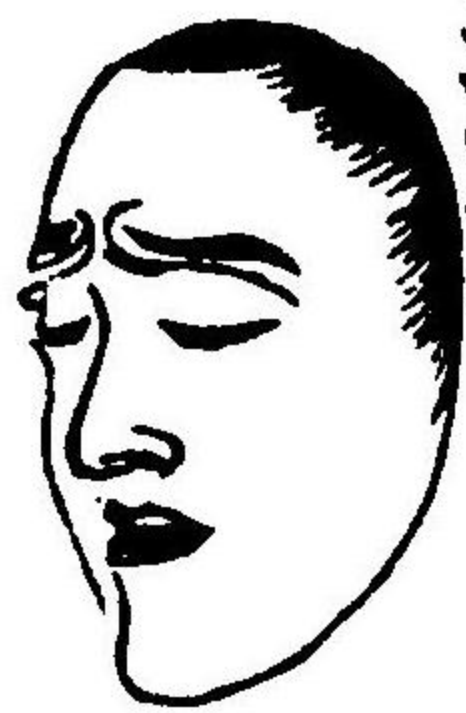
景清



蟬丸



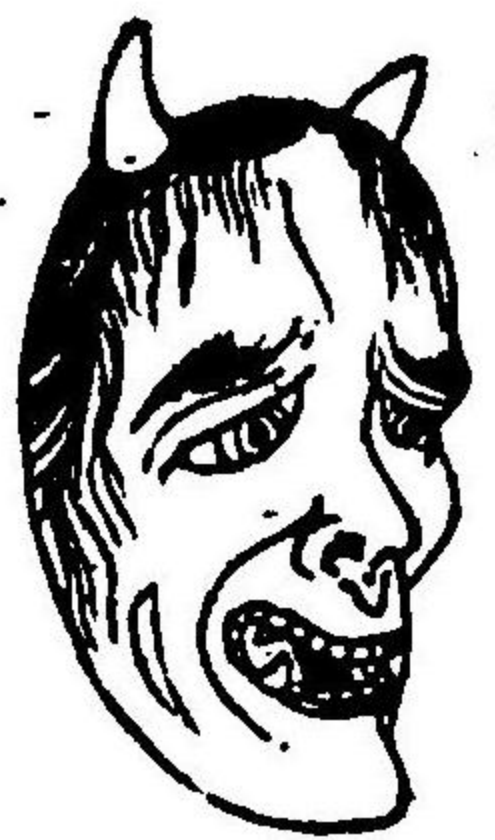
弱法師



搞姬女



生成



上ツクモ一

戸糺願ふ者も白皮もあかこ見ゆる花
乃憐盛之も意欲し都

○田

上ツクモ一 野の山標。ましくれ雲
おまろく夕陽跡る西山や又都の
ゆまにけり

○皇帝

上ツクモ一 壽おれは契り天長く地之
てある時もある

○大蛇

上ツクモ一 皇徳治もは國津神。爰にうま居る

二指。まやハおのあ共よ。ハ皇徳造るま

紫の。二十字。又まは孫子の始あ

○田村

上ツクモ一 四方は心あまのつら。時をせはゆる
意欲し都

○田

上ツクモ一 安樂世界より。まよこれ安樂
系現。あまの。あまの。あまの。あまの。
あまの。あまの。あまの。あまの。

○田

上ツクモ一 長家。まは。あまの。あまの。あまの。あまの。

神跡



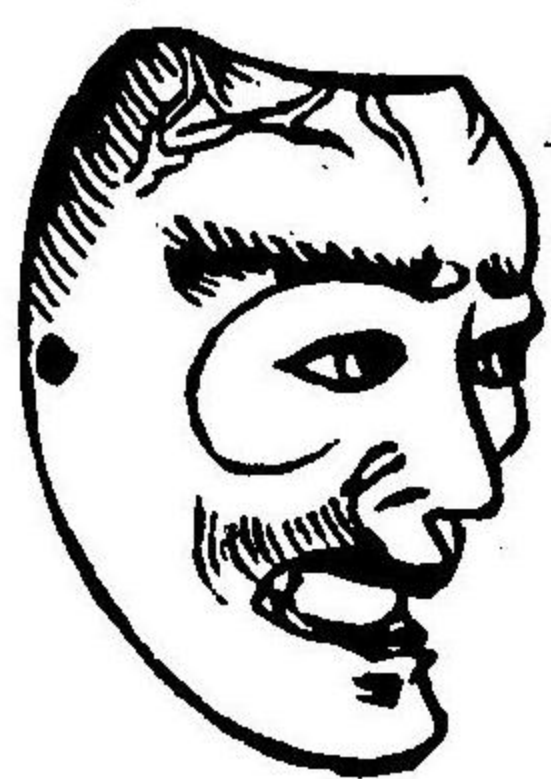
大悪尉



小悪尉



筋輕士



蛙



額が



面白れは事角や着ありのり乃をさく

○頼政

伏見れさるぬえし候るぬの水と尋
ぬ事てや治乃量よもあはれ

○同

の里守に指さる候り郷
ハ嶋

○ハ嶋

風道お長策あるまよ心を
○鞍馬天狗

○鞍馬天狗

花さうは昔んと云い山田

使公乗り馬よ鞍くらゆゆの山はれ

手折枝折をさくくよと果も遠り

はく末のきよと並あつり

あつり

○同

夕を跡も花のあゆみ種
はく果も遠り
かへる人

○敦盛

身のいふはまをさくくはより竹の

大癡見



小癡見



黒鬚



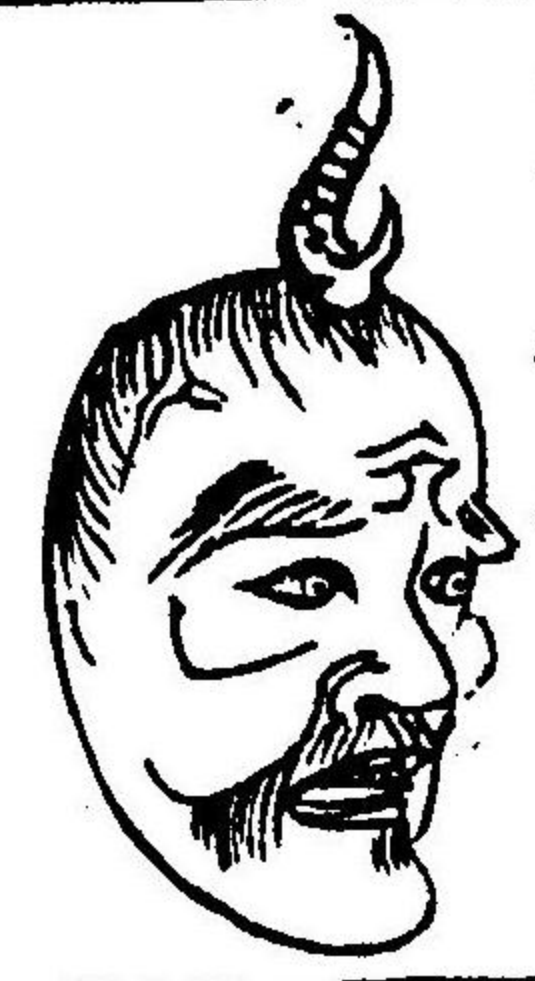
般若



狸々



一角仙人



小いも輝をれ振るは苗の名も多きれと
 も多明の吹笛ありは是も多き青紫の如
 えとれあり多きを後より行ありは多
 笛よりや多き多きは苗の流来れ海士の流
 きと多き多き

○盛久

長居ハ多きありありありありありありと
 海より申つる多きを多き出さける盛久と
 と多のりありありありありありあり

○服

名をとありありありありありありあり

東にそり多きく生田川あり。身をたれく社あり
 久きれとありありありありありありあり
 弓多きありありありありありありあり

○後成忠則

多きや浮多あり雷光小徳の愛の愛きに。明
 や多き登津の國の。難後多き事多き忠則あり。於
 多き路ありありありありありありあり

○同

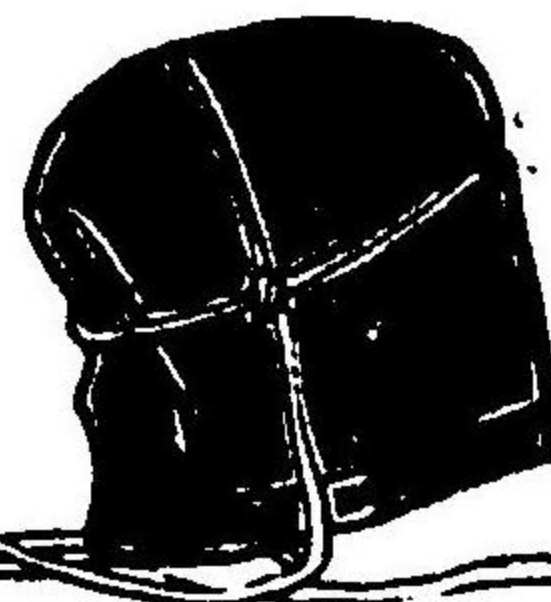
多き多き多き多き多き多き多き多き多き
 多き多き多き多き多き多き多き多き多き
 多き多き多き多き多き多き多き多き多き

○項羽

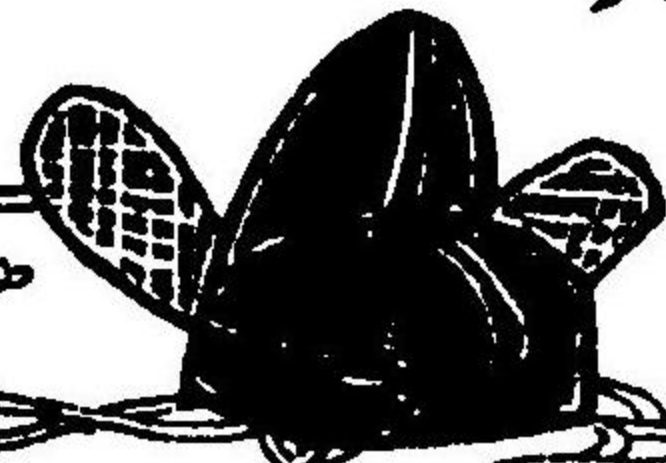
多き多き多き多き多き多き多き多き多き

小道具之圖

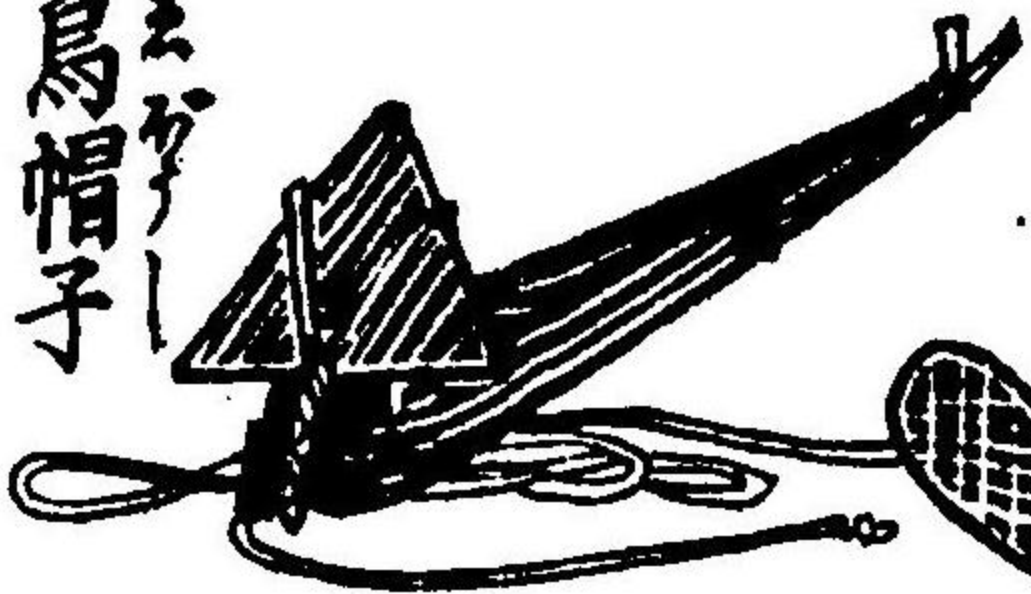
烏帽子



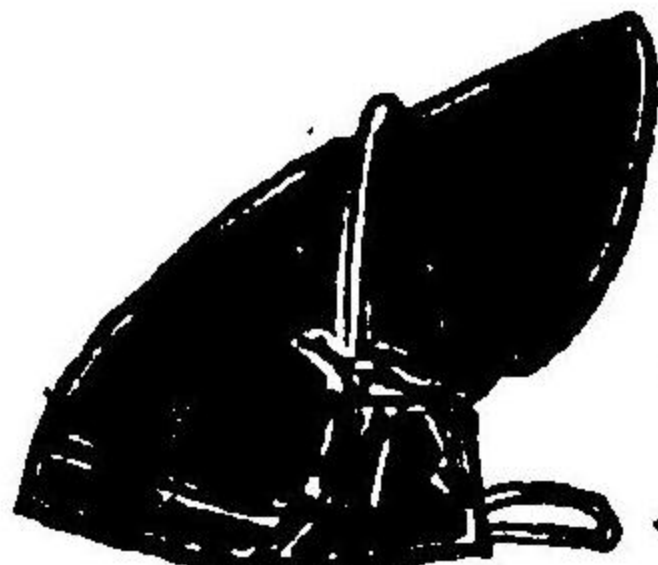
唐冠



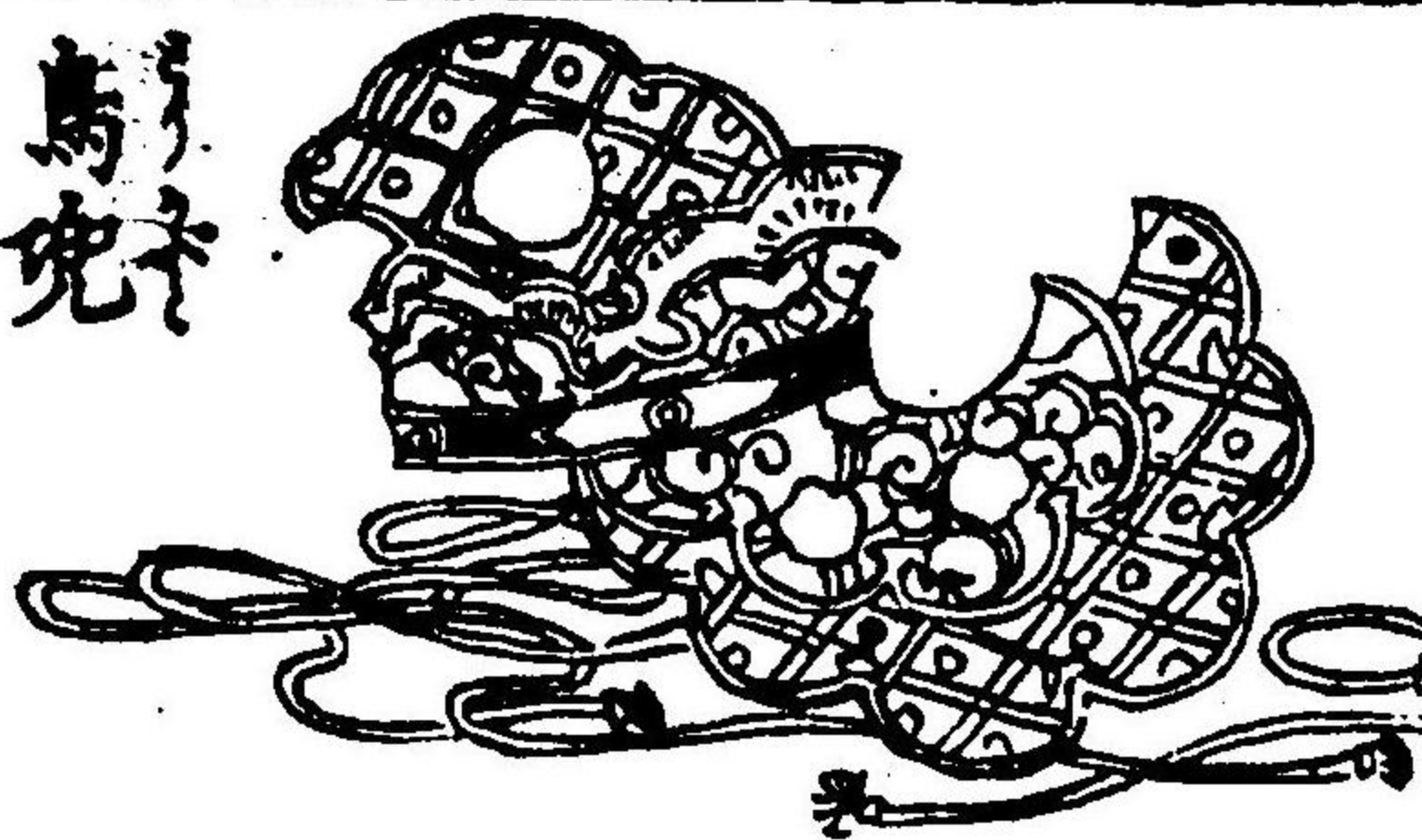
烏帽子



大臣烏帽子



馬兜



上ツラニ... 水音あり... 行船の... 水音あり... 行船の... 水音あり...

○夏 棠

上ツラニ... 然るに... 龍頭鷄舟... 龍頭鷄舟と申すも...

○回

上ツラニ... 龍頭鷄舟と申すも...

上ツラニ... 龍頭鷄舟と申すも...

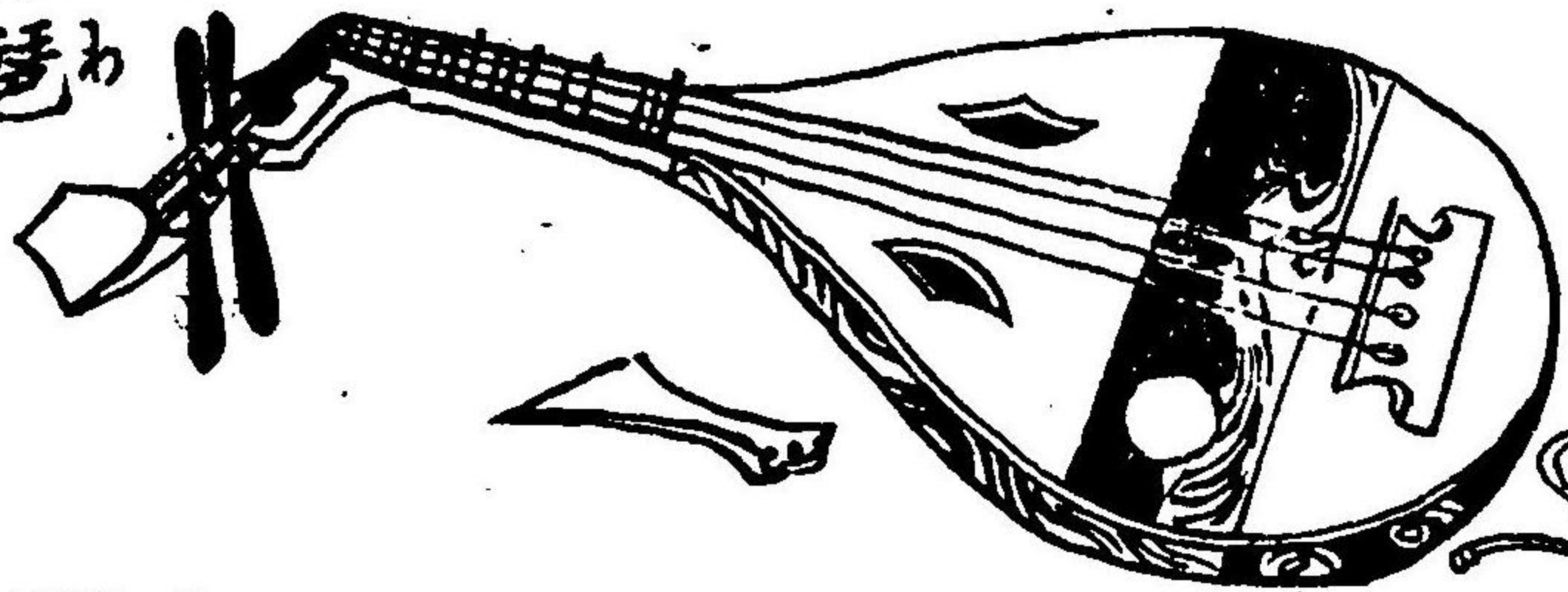
○春 棠

上ツラニ... 龍頭鷄舟と申すも...

○羅生門

上ツラニ... 龍頭鷄舟と申すも...

琵琶



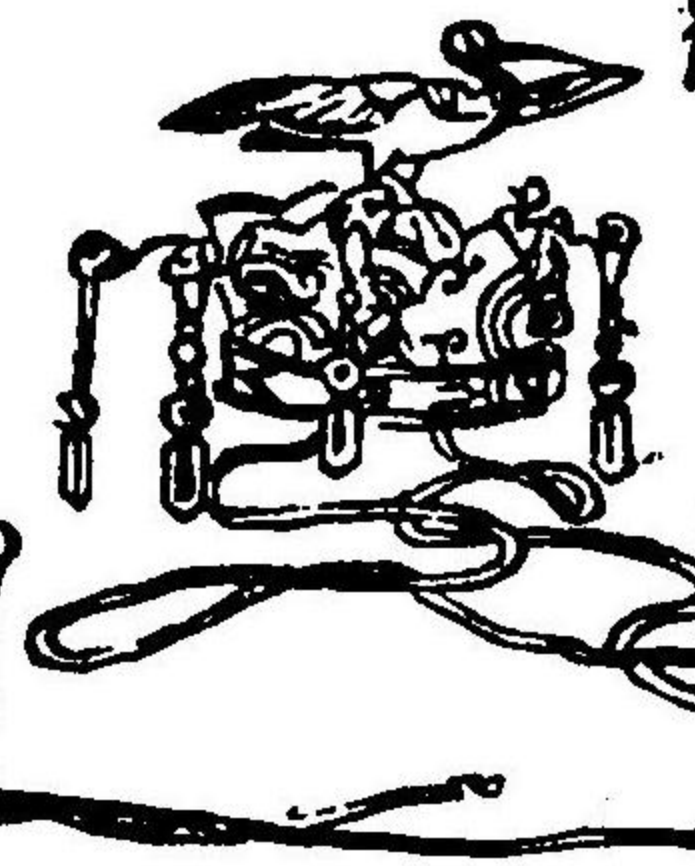
野干立



龜



鶴



龍頭



三三六十一
卷心乃ひとりの巻心はものつ海をり
みある中は酒宴の般

○同

上
志那の葉乃葉も咲 白ひも深
くまあるよ面を巻て人こころの満
中れまもふれきたり 花もあちと
色く居よりと悟らま

○姓政

上
一考北風管の秋葉の嶺の雲を
かき散風風も是にめては 梧竹よ花
多りて 柳を流らぬと 律呂は

上
考ふに 考ふに 考ふに 考ふに
もむうを返の舞のを 衣笠山も
うをまきたり 花はあちと 面白
ぬ 花も

○熊野

上
雲のしとて 雲のしとて 雲のしとて
名よたふまのり 花もあちと

○同

上
面をひるうふ 眺もは 大悲擁護の
後 熊野権規のう 花もあちと
今 熊野 権規のう 花もあちと

舍利



羽團



鉄形



干珠

鎌



幣



珠數



○杜 蘇

今運ぶたひ人よ昔をかゝるやのふれ
やうくあれぬるまゝあらね

○同

暗きにゆくぬありあきれ 光り著き月
やうくぬるまゝのまゝありぬるまゝのまゝあり
陰陽の神とていふも 時業平のまゝあり
かゝるまゝ申物語りかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり

○半 薪

きぬめぬきぬるまゝの宿のありを推して
らぬのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり

○東 北

年月をぬるまゝ軒端の梅の花
あやをぬるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり

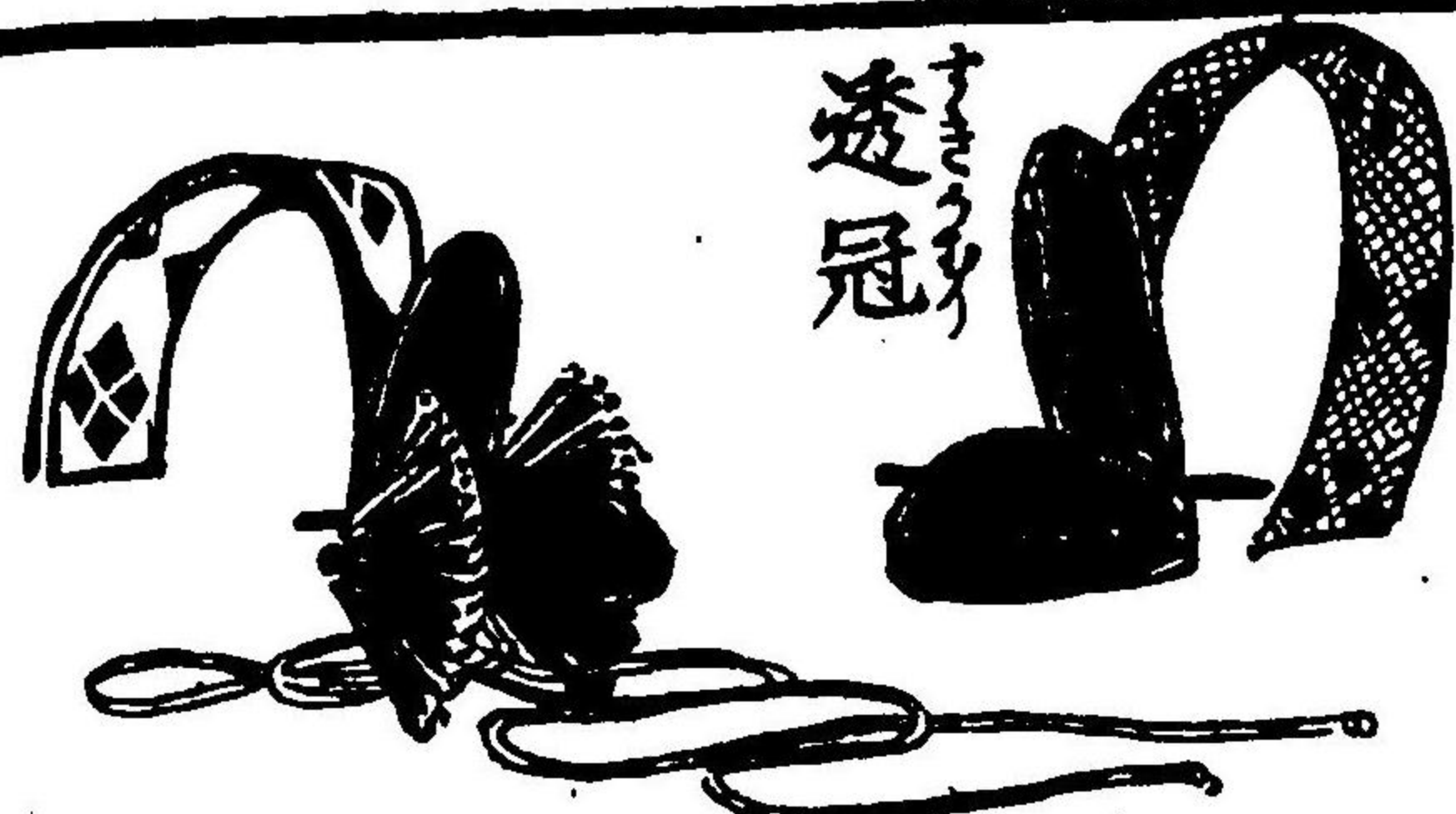
○同

宿をぬるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり
かゝるまゝのまゝありかゝるまゝのまゝあり

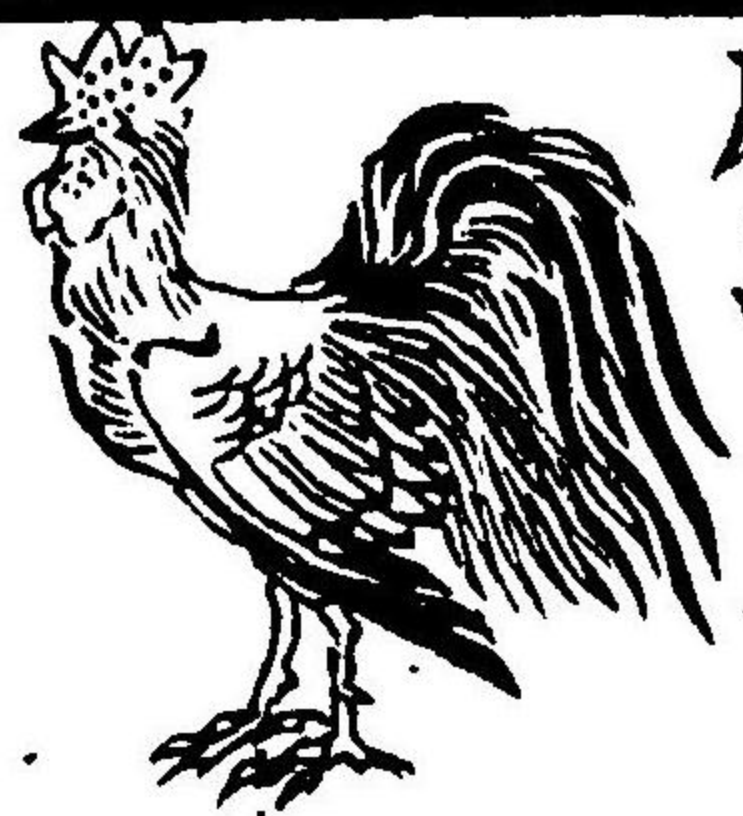
葛桶



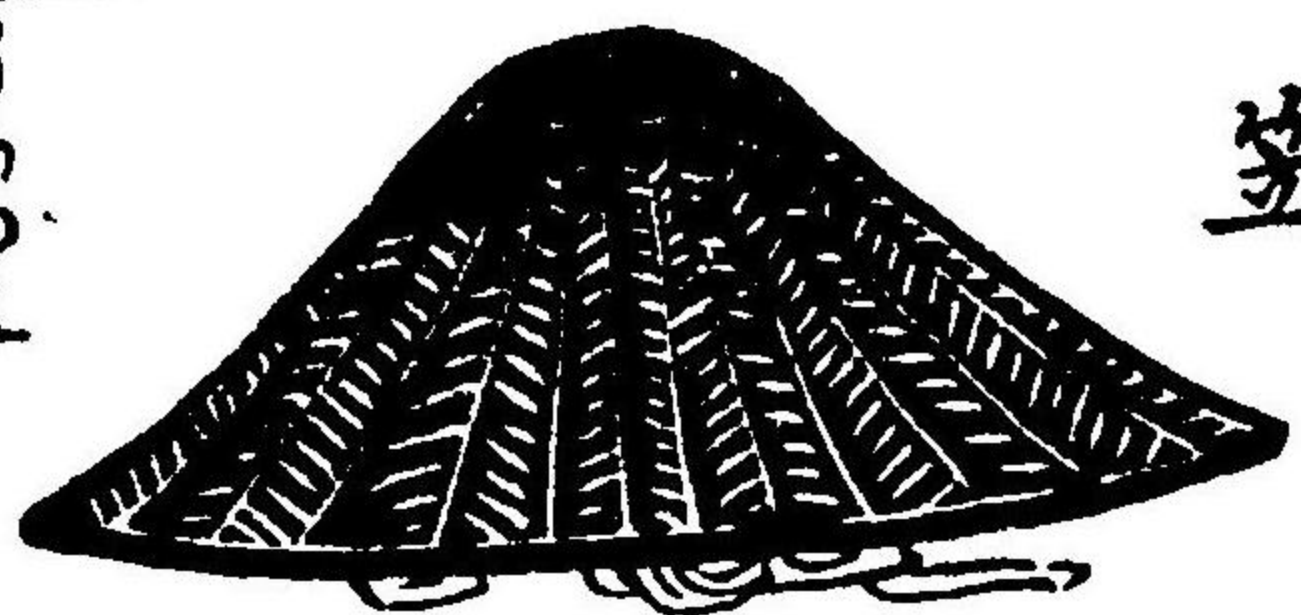
透冠



庭鳥



笠



打杖



一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

○祇 五

有月はくさくさをしる。おもしろい。つれあはれ。こゝろとわきまをたよ。色はなま。や。思ひをたす。た。花のなをたをかき。と一人はあひあはれ。法海。

○藤

実を思へる者あり。誰よの思へる。花のなをたをかき。と一人はあひあはれ。法海。

○も 浦

弱法師。実を思へる者あり。誰よの思へる。花のなをたをかき。と一人はあひあはれ。法海。

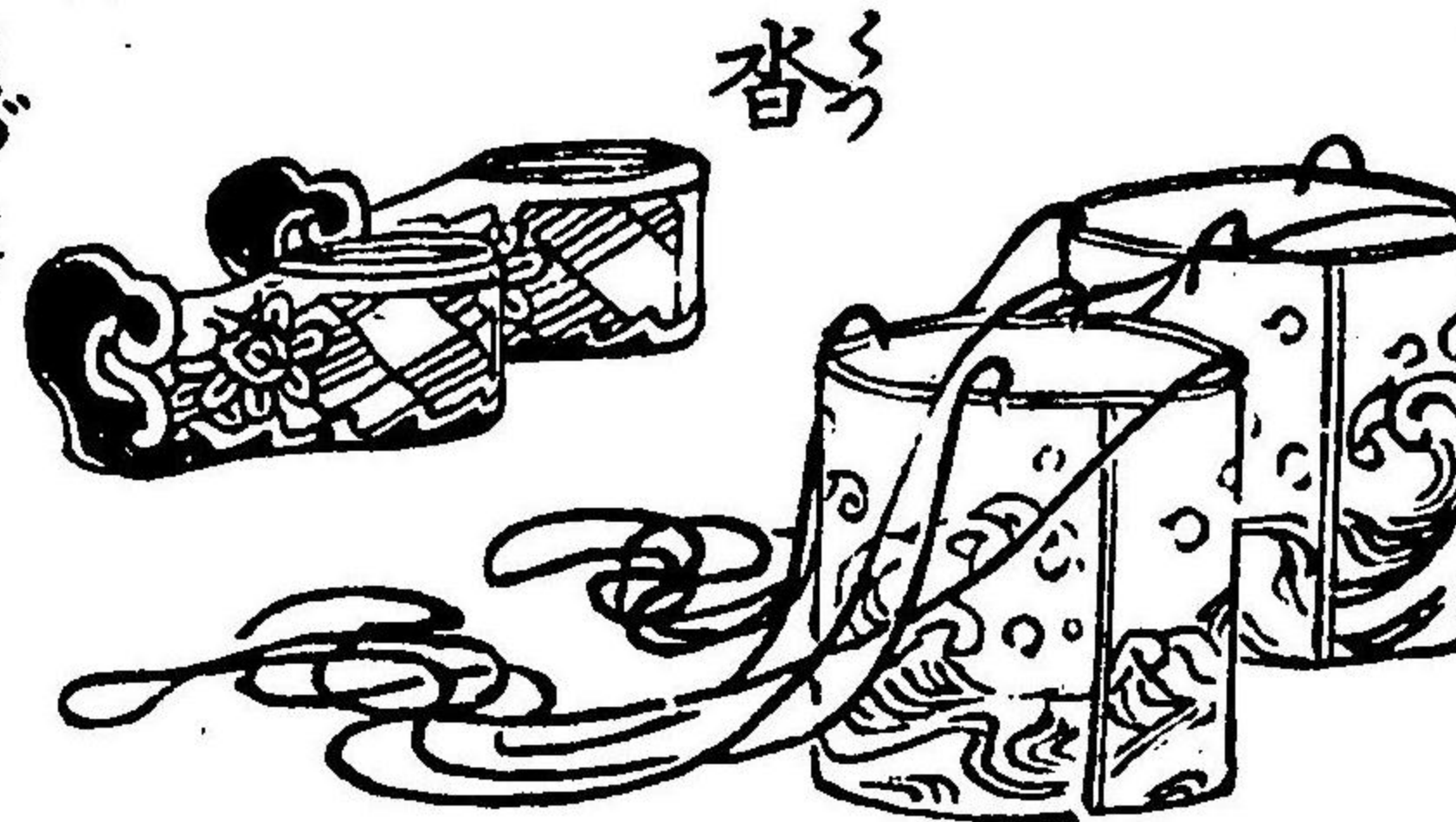
○六 浦

有月はくさくさをしる。おもしろい。つれあはれ。こゝろとわきまをたよ。色はなま。や。思ひをたす。た。花のなをたをかき。と一人はあひあはれ。法海。

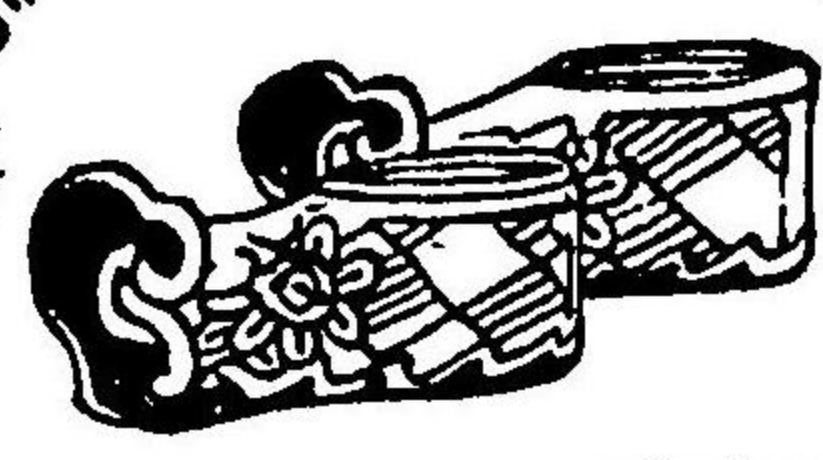
○葛 城

有月はくさくさをしる。おもしろい。つれあはれ。こゝろとわきまをたよ。色はなま。や。思ひをたす。た。花のなをたをかき。と一人はあひあはれ。法海。

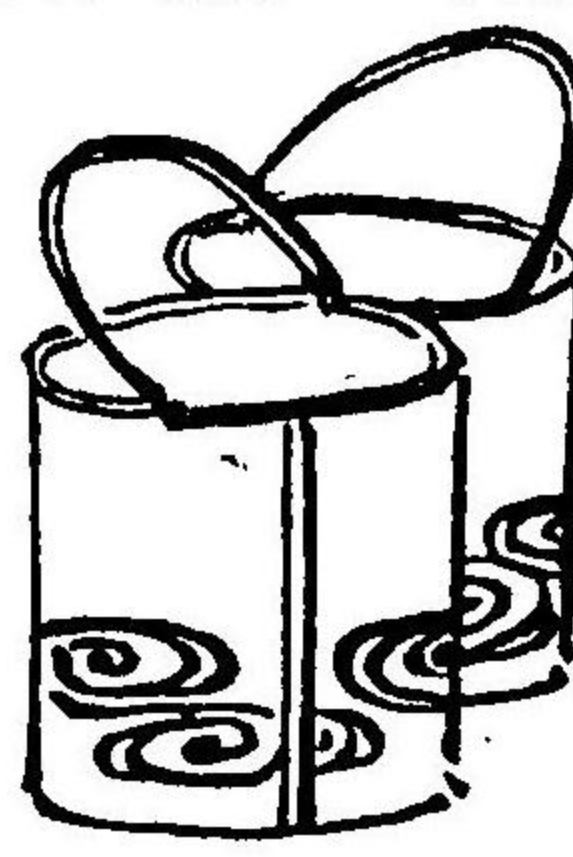
田子



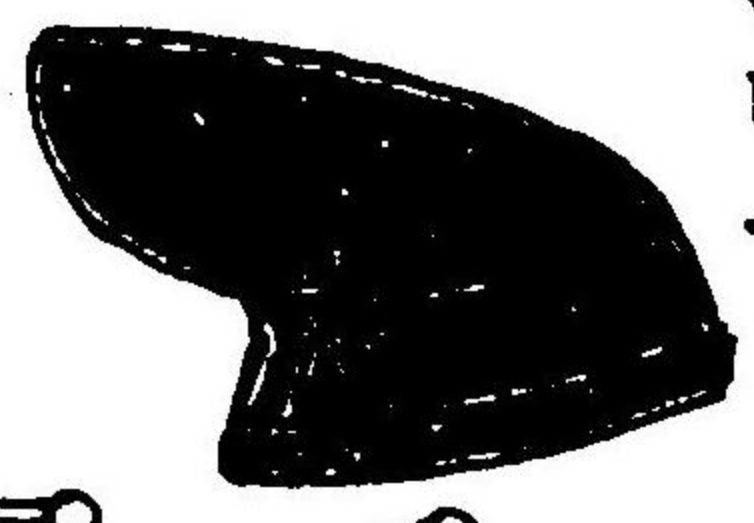
沓



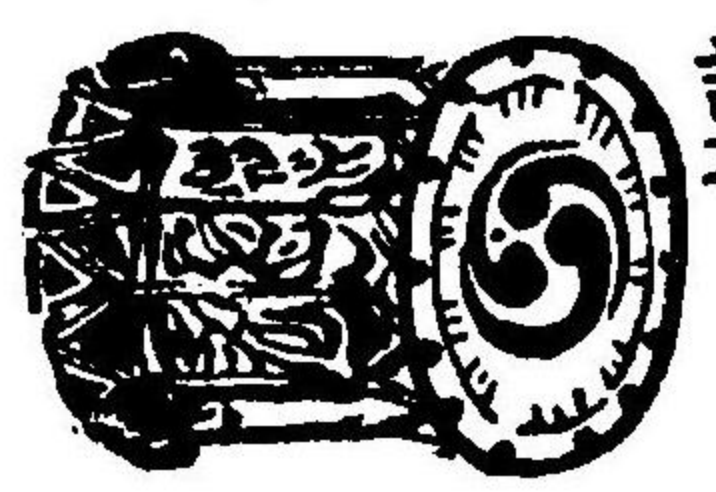
水桶



折烏帽子



葛藪



鈴



一、此の言の旨の事あるは、
一、此の言の旨の事あるは、
一、此の言の旨の事あるは、

○押紙洗

其歌人の名所も皆庭にありあり
君の宣旨は縁結あり

○胡蝶

あゝ此の言の旨の事あるは、
にさあおるは、
○小督

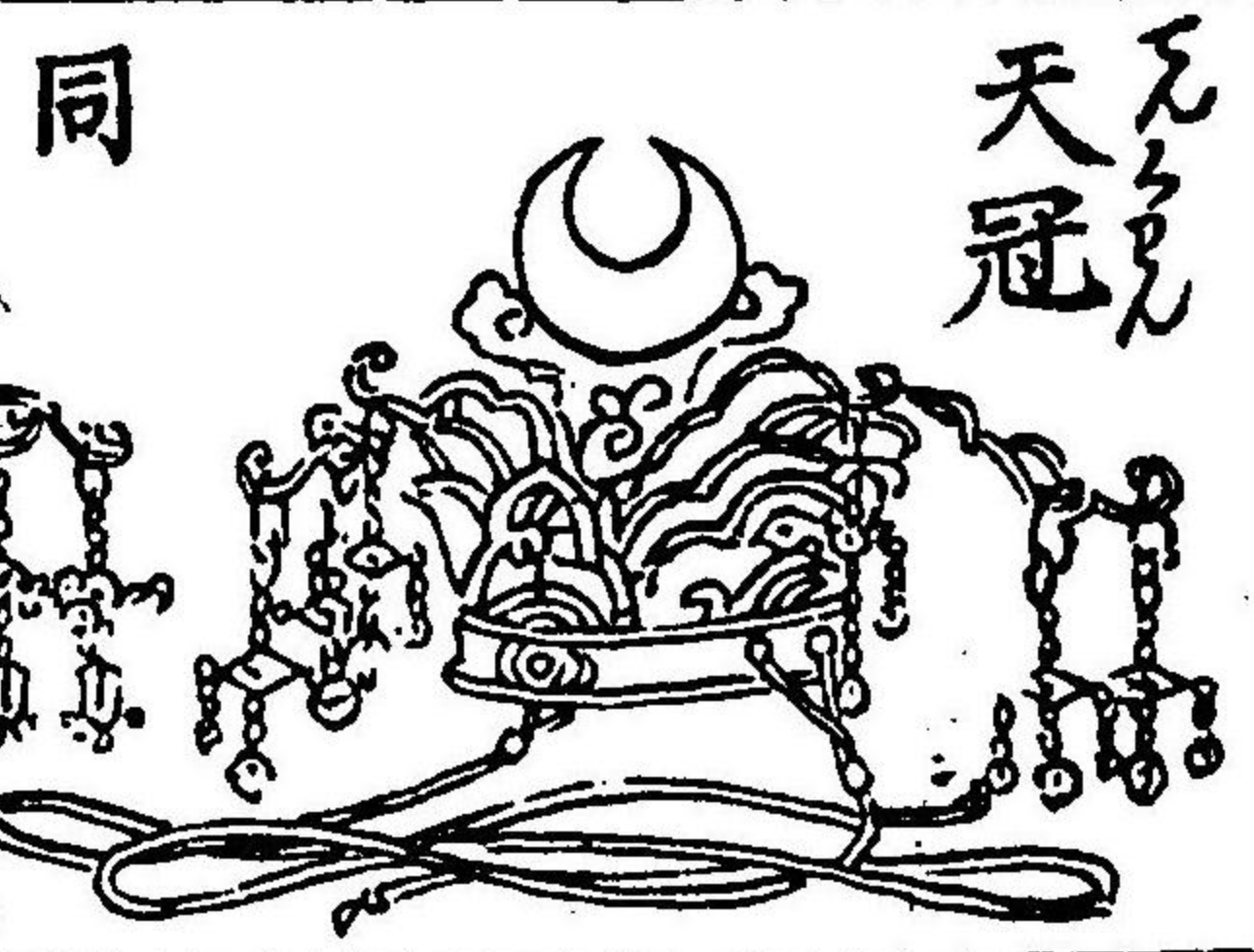
月乃宮古名外とる、
一、此の言の旨の事あるは、
一、此の言の旨の事あるは、
とあいの、
○かき物狂

上ヨリ

柳をけりたるを、
てぬきたれ、
梅の香も、
北条を、
り、

○雲雀山

えん 天冠



同

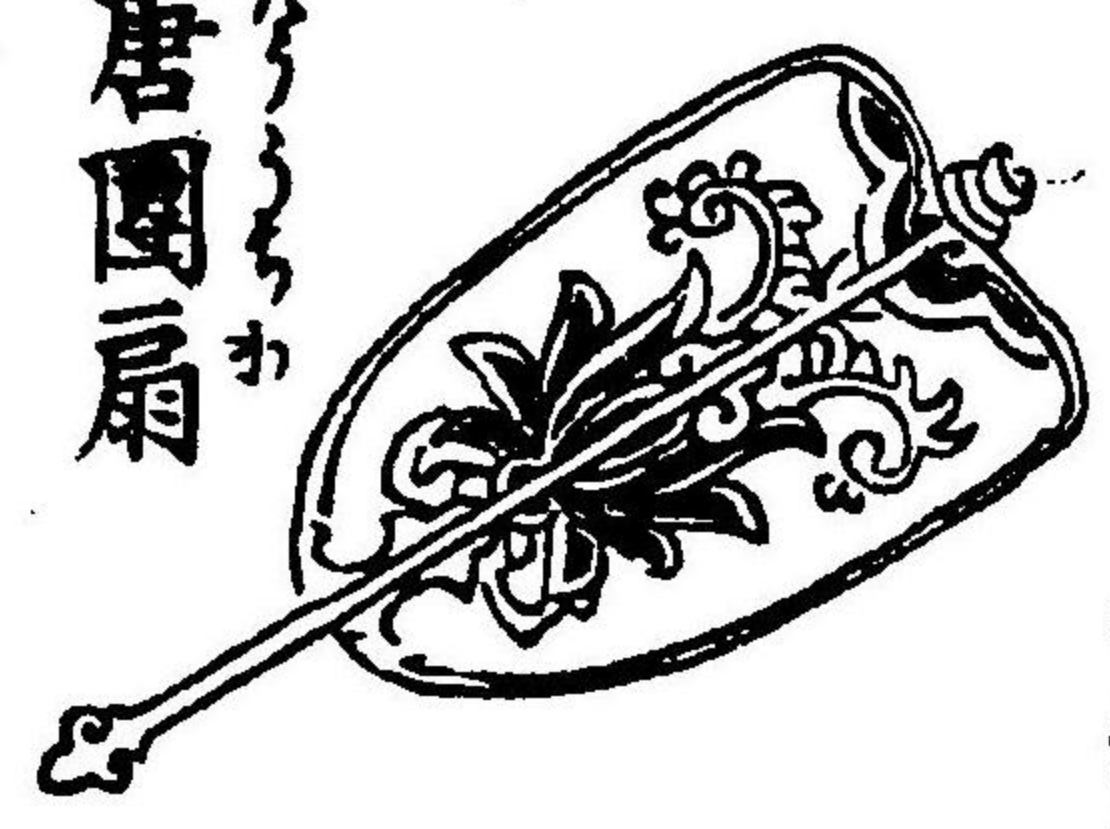


こちん 小扇子

まふあふぎ 舞扇子



かうじゆわ 唐團扇



上リツノ二ノ一ノ二ノ三ノ四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百

月を忍びて月にはなるといふ

乃森の下草等は冬きり花ありと云ふ

自らいふは氣母法を記す

のそまのつとめと云ふは花桃をいふ

〇月

美さや中をいふは

きさきと云ふは

有るは

のそまのつとめと云ふは

美さや中をいふは

きさきと云ふは

有るは

〇班女

お梅は

お梅は

お梅は

お梅は

〇林木

お梅は

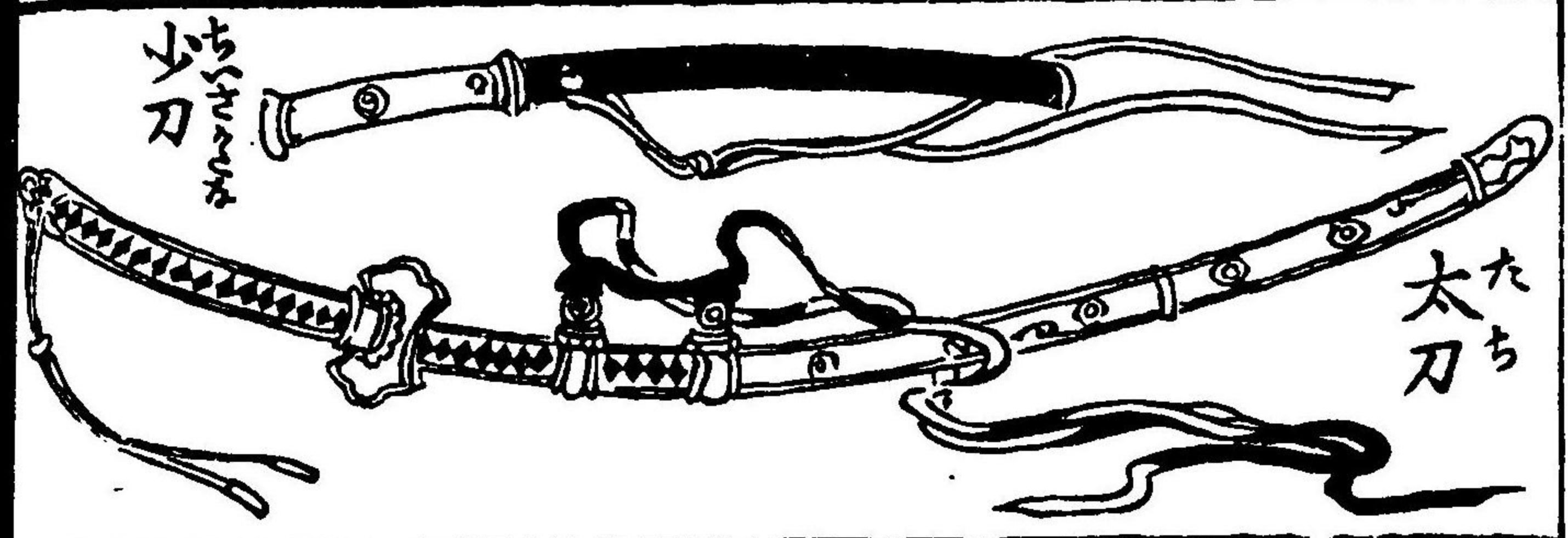
お梅は



斧よき

松明たのけ

すゝい網あみ



小刀ちひなな

太刀たち

三井寺
 月を山に照らす時お鳥の鳴く
 由粟津に森を見えし海に遊ぶ向ふ
 影をまきと月をまきしにれ鏡山は海田矢
 ま勢は後し舟のよるに通ふやとあぐ
 とも月の後をたのつづき舟をこられ
 と出づる舟のよるにまきしつづき

○三井寺

月を山に照らす時お鳥の鳴く
 由粟津に森を見えし海に遊ぶ向ふ
 影をまきと月をまきしにれ鏡山は海田矢
 ま勢は後し舟のよるに通ふやとあぐ
 とも月の後をたのつづき舟をこられ
 と出づる舟のよるにまきしつづき

○一回

月夜島啼て 船をよほりて

江村の漁火もけのうら半夜の鐘のひび
 船は舟のよるにまきしつづき
 と別し漁火の輝きもあらうら半夜の鐘のひび
 新江のよるにまきしつづき
 舟をまきしつづきの鐘のひび

○末賊

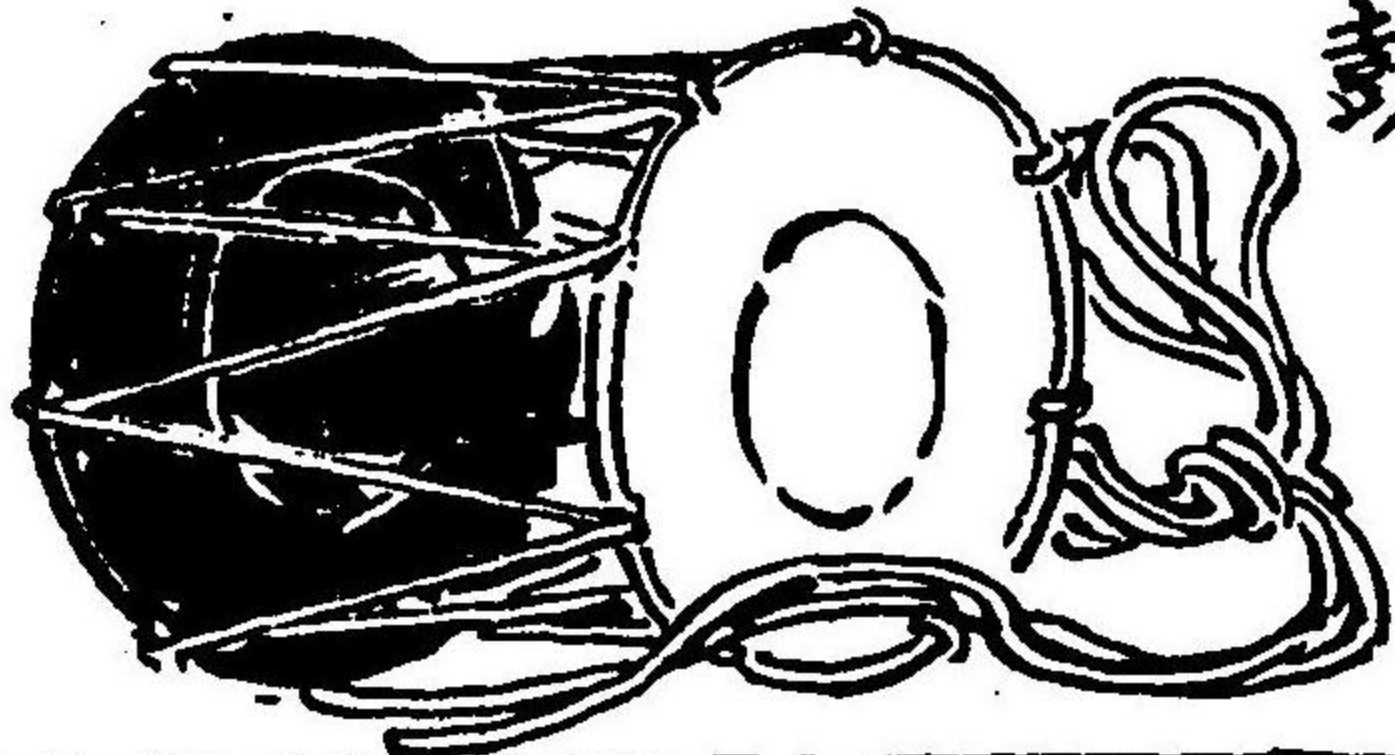
舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび

○西行様

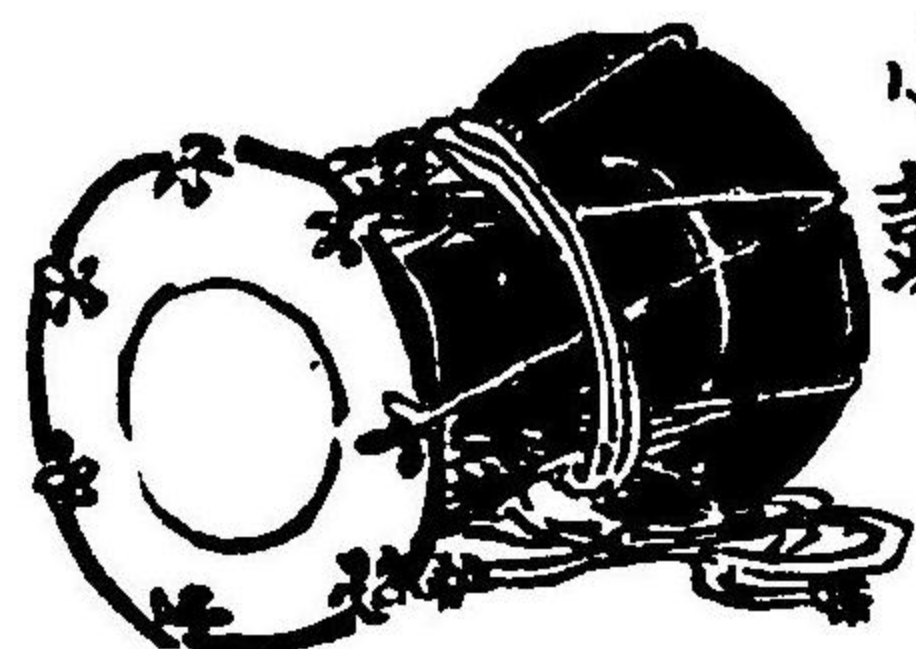
舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび
 舟をまきしつづきの鐘のひび

大鼓

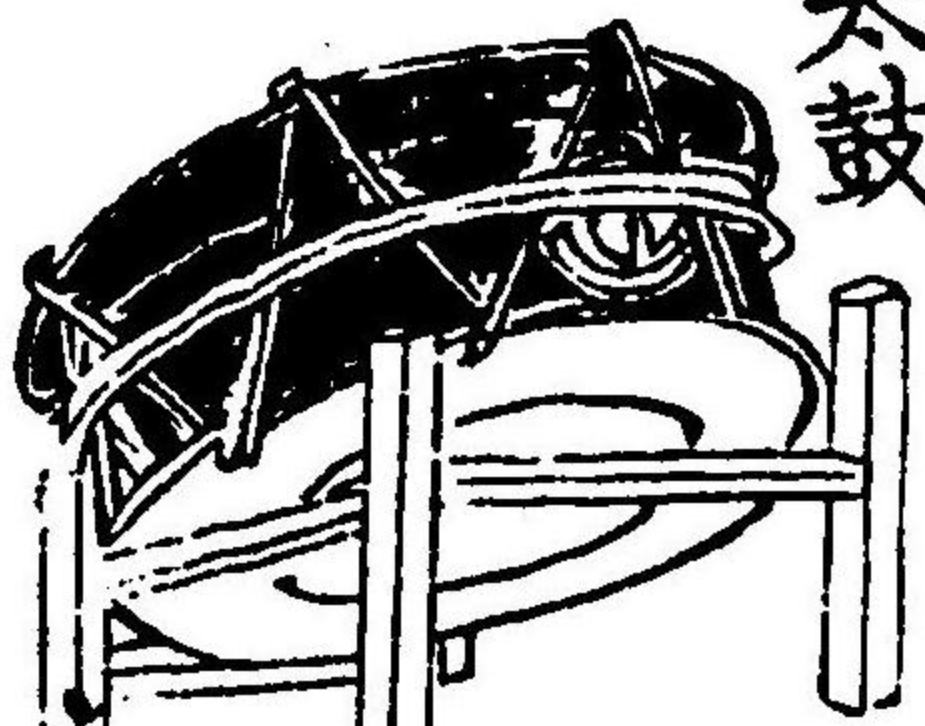
笛



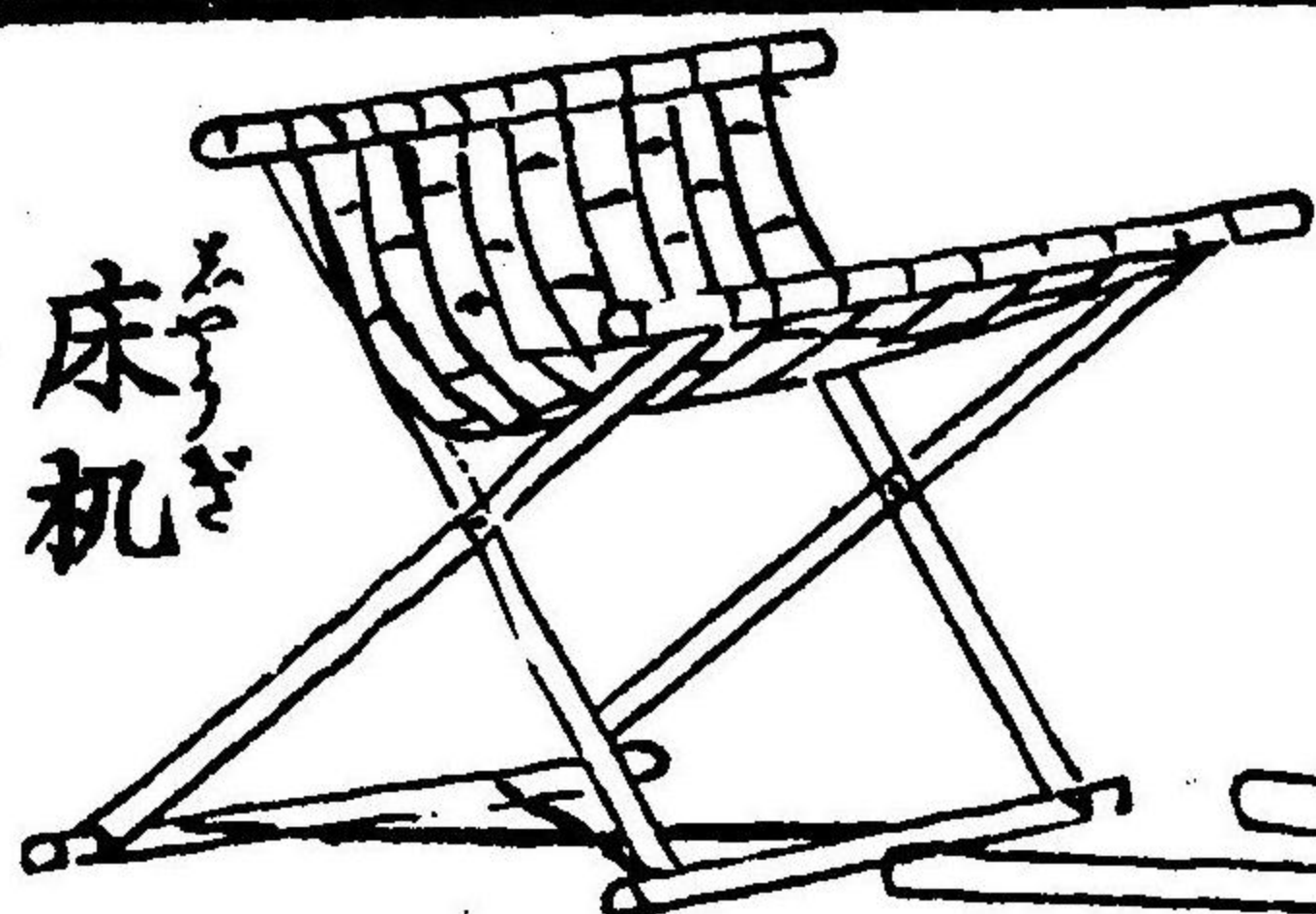
小鼓



大鼓



床机



大井河舟をまゝに流すかきつらる

○鶺鴒小町

和子のみちあはれにゆきゆき
田舎者から使へてお宿のまへに
いふ事なきお歌の花よりゆ

○櫻川

書よりいふま都はなれは櫻川
波の音にうたふもれくまのつらりと清きわら
花の香もほろゆふもあはれ者のとあは
世のまよひはほろゆきとほろゆき
かきつらるる花の音にうたふもれくまのつらりと清きわら

水の花実あはれにうたふもれくまのつらりと清きわら

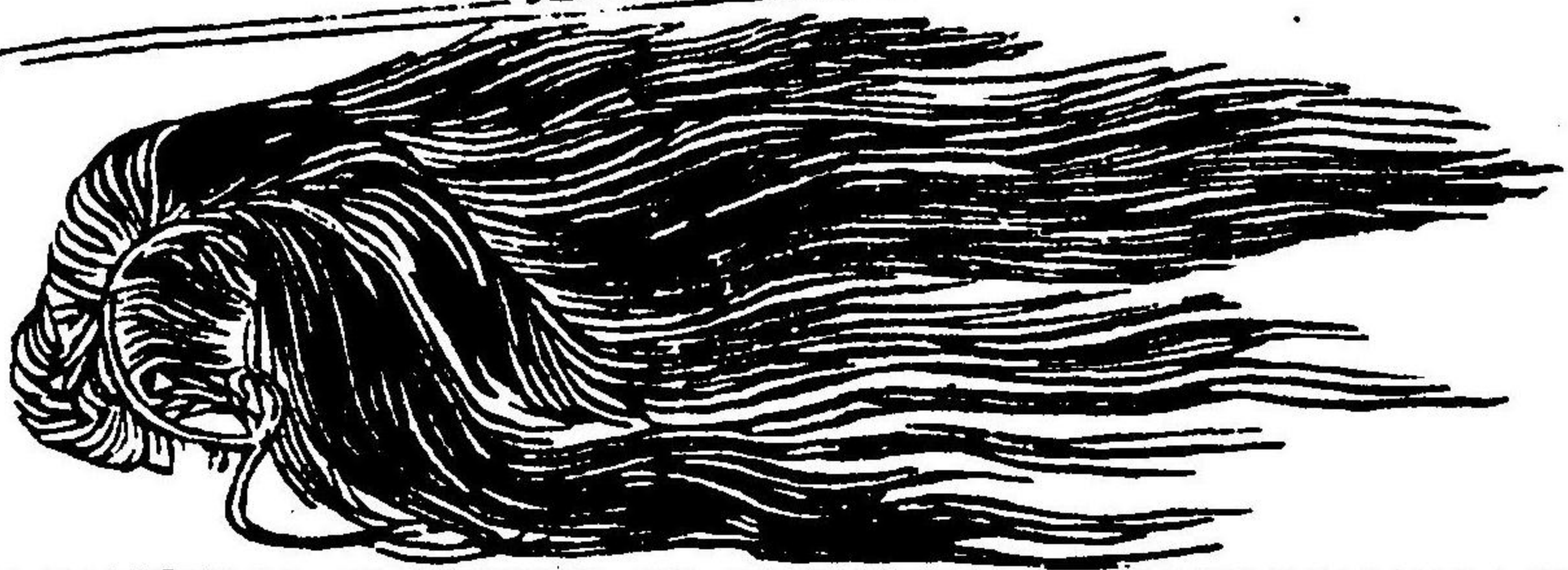
○花筐

おもちのたけなみとけりてお宿のまへに
よめつらあはれは春の津をゆきゆき

○一回

おもちのたけなみとけりてお宿のまへに
よめつらあはれは春の津をゆきゆき
おもちのたけなみとけりてお宿のまへに
よめつらあはれは春の津をゆきゆき

黒頭



三二一 黒頭を飾りしあふもちまひ扶酒杖
乃舞と如人思ふ事

○巻箱

トヨクニ 又非き出雲の巻箱はくさかしの巻
まきぬ巻箱のくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

○飛雲

トヨクニ 水面彼岸の巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

釋杖

白垂



黒垂

○羽衣

トヨクニ 錦りの波よ浮島はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

○駉

トヨクニ 浦田の駉はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

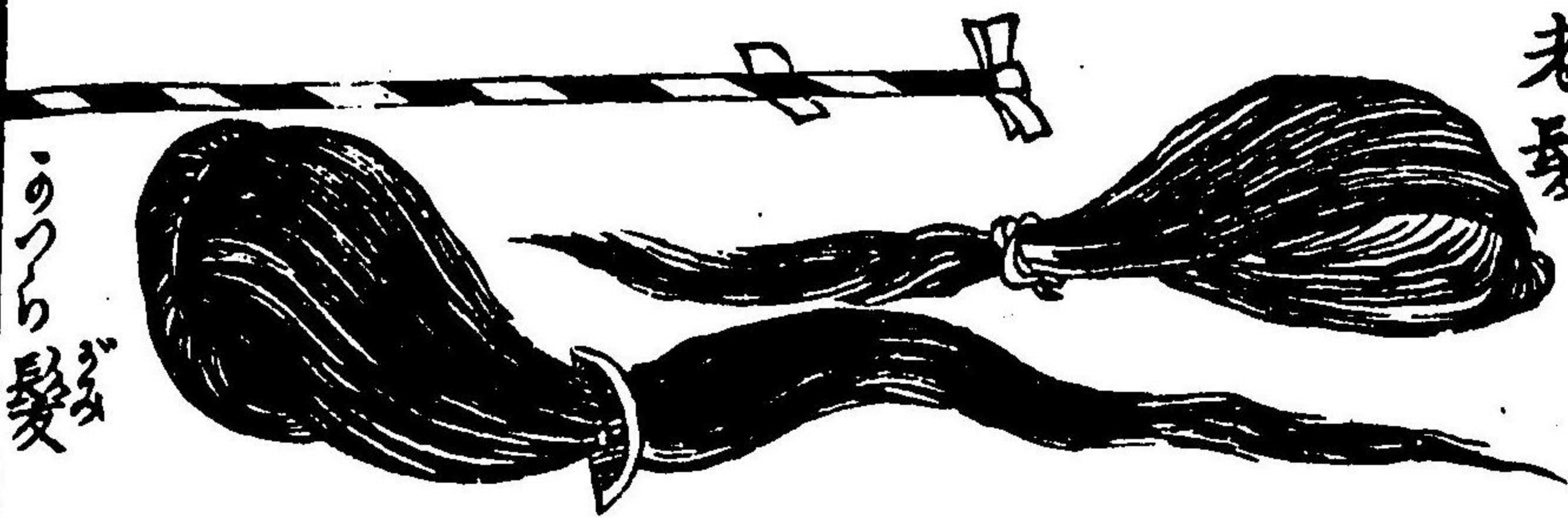
○阿漕

トヨクニ 通ふ子鳥はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

○阿漕

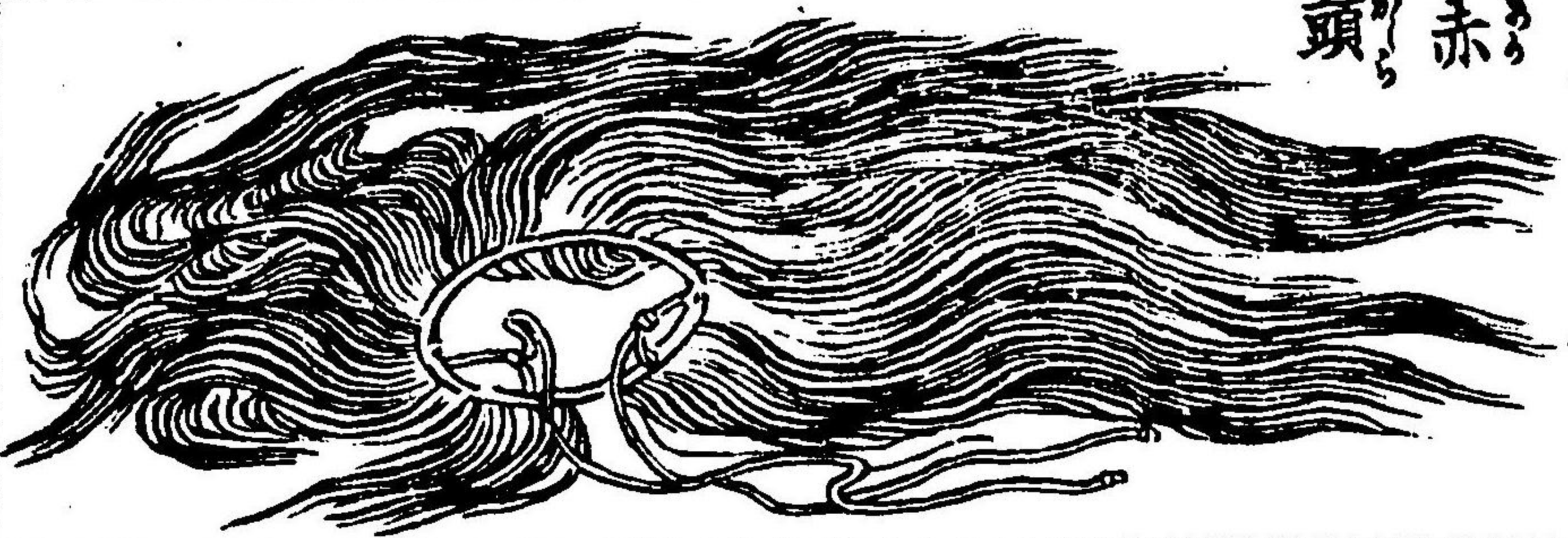
トヨクニ 通ふ子鳥はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱
くさかしの巻箱はくさかしの巻箱はくさかしの巻箱

老髪おきなげ



あつら髪あつらげ

赤頭あかづか



浦上うらがみの髪かみは、
浦上うらがみの髪かみは、

○紅髪べにがみ

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

○赤髪あか髪

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

○黒髪くろがみ

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

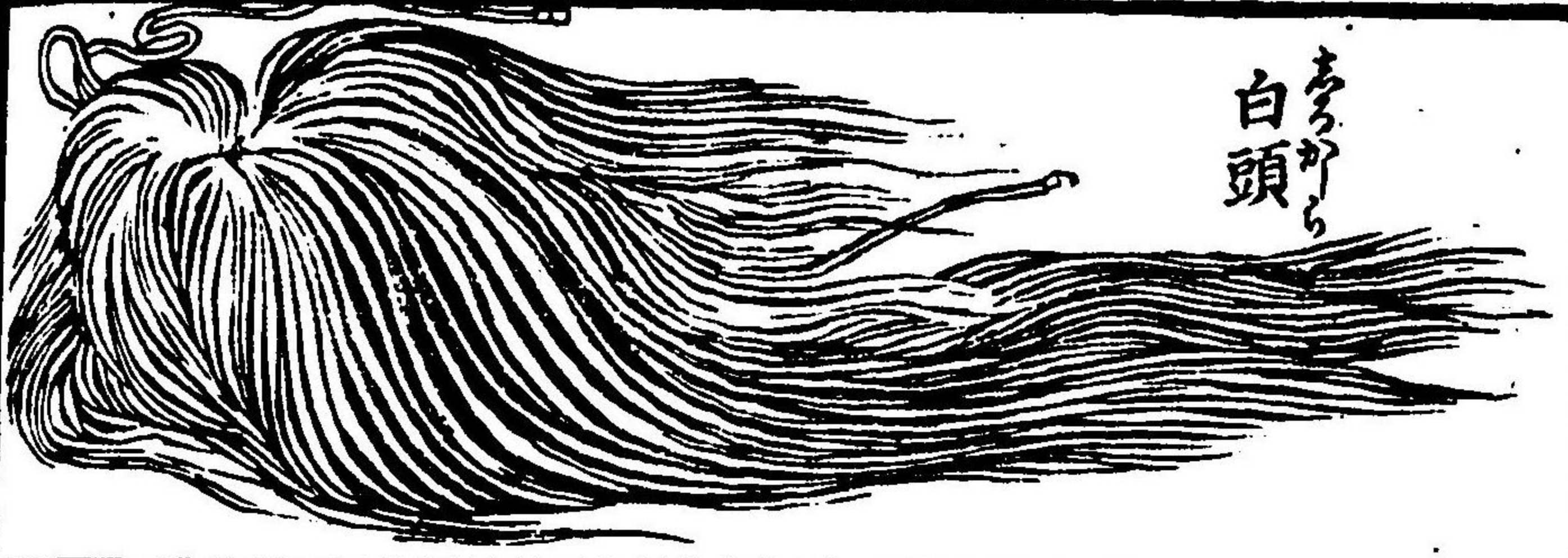
○源氏供養げんじくやう

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

○小髪こがみ

上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、
上かみの髪かみは、

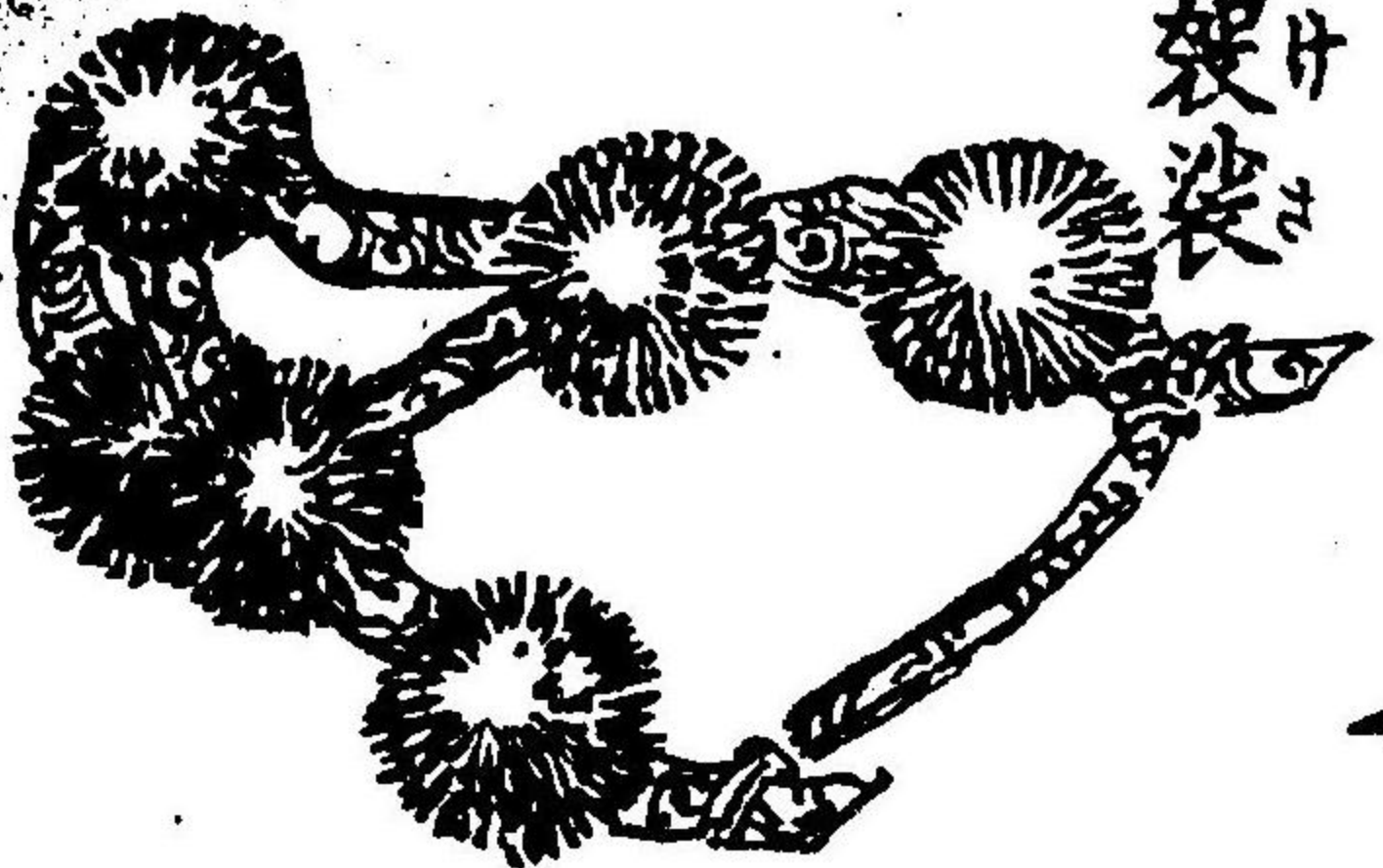
白頭しろがしら



長靴頭巾ながはきかぶと



袈裟けさ



四方は相も、の自ひみちをよそ
情の道は、清のも、先おゆとひを
心

○雲林院

上
備むるこも、清の道は、先おゆとひを
あしひひ、清の道は、先おゆとひを
其の清ある

○國梅

上
三吉野あるを、清の道は、先おゆとひを
系律の、清の道は、先おゆとひを
ね風

五節のり、あはれある

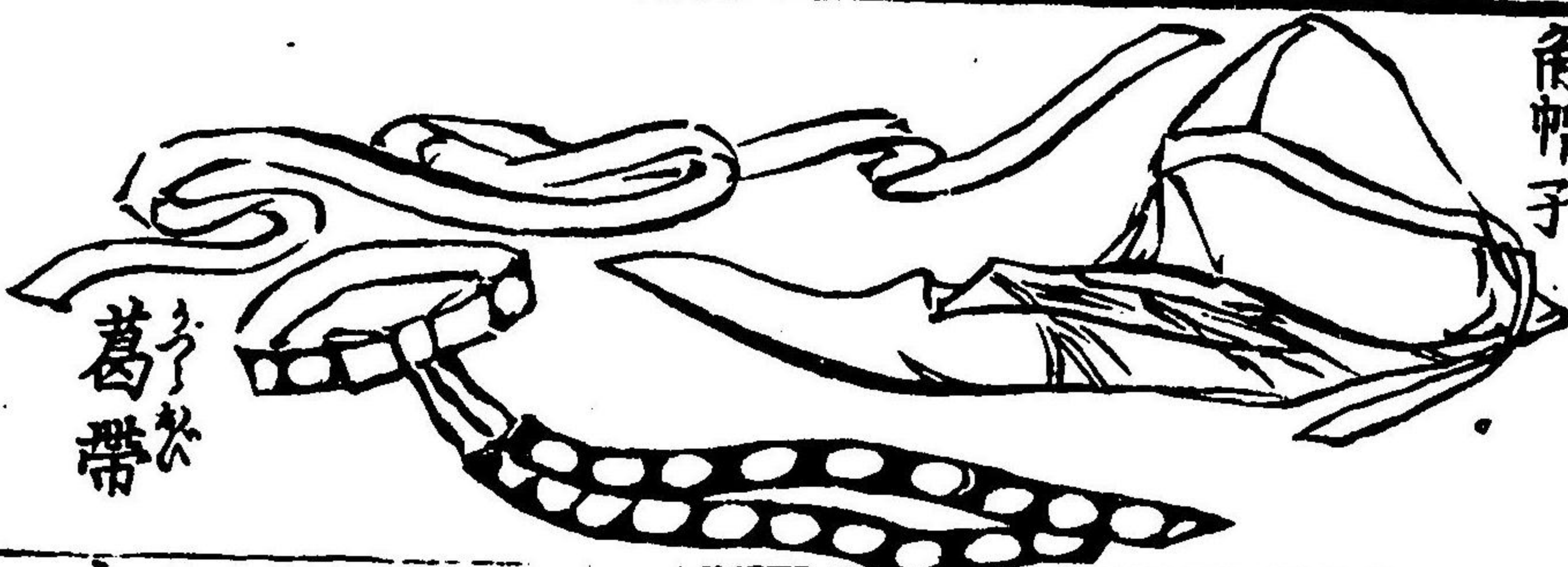
○野守

上
む、仲磨る、我日本を思ふ、あ
まの原あり、清の道は、先おゆとひを
乃山陰の、清の道は、先おゆとひを
まの、清の道は、先おゆとひを
那

○小鍛冶

上
聖は、清の道は、先おゆとひを
清の道は、先おゆとひを
乃、清の道は、先おゆとひを

角帽子



葛帯

上多
...
都よも似ぬ復若おの所...

○踏子
...
又ハ糸竹の...

○精殖

上多
海海...

る原...

○須ノ源氏

上多
...
女女の...

○鳥帽子折

上多
か掠は...



此は大河と申共な事なれば、

○狸

上ヨリテ、
 ○よもつ、
 の竹の葉の葉、
 春のあめ、
 夕のあめ、
 霧のあめ、
 雪のあめ、
 雨のあめ、
 風のあめ、
 土のあめ、
 空のあめ、
 地のあめ、
 水のあめ、
 火のあめ、
 木々のあめ、
 草花のあめ、
 虫々のあめ、
 鳥々のあめ、
 魚々のあめ、
 獣々のあめ、
 人のあめ、
 神のあめ、
 鬼のあめ、
 魔のあめ、
 妖のあめ、
 怪のあめ、
 精のあめ、
 霊のあめ、
 魂のあめ、
 魄のあめ、
 三魂のあめ、
 七情のあめ、
 五徳のあめ、
 十善のあめ、
 百八十二箇所のあめ、
 萬々のあめ、
 一切のあめ、
 無量のあめ、
 無数のあめ、
 無量のあめ、
 無数のあめ、

山崎生流小波集於 序 同人

明治廿八年二月廿五日印刷
 同年二月廿八日發行

定價金八錢

東京市深川區
 吉永町七番地

校訂者 寶生九郎

同 市神田區
 裏猿樂町九番地

編輯者 矢田正義

同 市日本橋
 通四丁目十番地

印刷兼
 發行者 江島伊兵衛

版權
 所有

